高崎市文化財調査報告書第249集

上中居辻薬師遺跡3

－共同宅地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2009

高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書第249集

上中居辻薬師遺跡3

－共同宅地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2009

高崎市教育委員会

例　言

1．本書は、共同宅地建設に伴う上中居辻薬師遺跡第6次の埋蔵文化財調査報告書である。

2．本遺跡は、群馬県高崎市上中居町辻薬師1601番地1ほかに所在している。

3．本調査及び整理作業は、高崎市教育委員会が委託契約を締結した有限会社毛野考古学研究所の協力を得て実施した。

4．発掘調査の体制は、以下の通りである。

　高崎市教育委員会　　田口一郎、角田慎也

　有限会社毛野考古学研究所　　口沖剛史、高橋清文、有山径世

5．発掘・整理作業は、平成20年11月19日～平成21年9月30日の期間で実施した。

6．本遺跡は、高崎市教育委員会の遺跡番号で429である。

7．本書の執筆については、Ⅰを田口、それ以外を有山が行った。

8．石器の実測・観察は土井道昭（有限会社毛野考古学研究所）が行った。

9．本書に関わる資料は、一括して高崎市教育委員会が保管している。

10．発掘調査・整理作業に携わった方々は以下の通りである。（五十音順・敬称略）

【発掘調査】

石倉稔夫　井上秀章　神山早苗　駒形邦子　佐藤　修　高木義明　高野　繁　田辺　昇　角田宇三郎

廣瀬勝光　牧野完一　和田敏明　綿貫瑛一

【整理作業】

大塚規子　瀬尾則子　永井祐二　半澤利江　深谷道子　真下弘美

11．発掘調査の実施から報告書の刊行に至る過程で下記の機関・諸氏のご協力を賜った。記して感謝申し上げます。（五十音順・敬称略）

カネコハウス有限会社　ＪＴ空撮　有限会社スミヤ測量　大東建託株式会社　山下工業株式会社

外山政子　三浦京子

凡　例

1．挿図中の北方位は座標北を、断面水準線数値は海抜標高を示す。座標は世界測地系を用いた。

2．遺構・遺物の縮尺は以下のとおりである。遺物写真は遺物実測図とほぼ同縮尺である。

　遺構　全体図：1/200、竪穴住居跡：1/60（カマド：1/30、掘り方：1/120）、溝：1/80

　遺物　土器・石器：1/3

3．遺物観察表に示した計測値の（　）は復元推定値を表す。

4．遺構及び土器の色調観察は『新版　標準土色帖』（農林水産技術会議事務局　財団法人日本色彩研究所監修　2006）に従っている。

5．遺物番号は、実測図・観察表・写真図版ともに共通である。

6．本書掲載の第1図は高崎市発行1/2,500「高崎市都市計画基本図」、第2図は国土交通省国土地理院発行1/25,000「高崎」を使用した。

目　次

例言・凡例

目次

図版目次・表目次・写真図版目次

Ⅰ　調査に至る経緯 ……1

Ⅱ　地理的・歴史的環境 ……2

1．地理的環境 ……2

2．歴史的環境 ……2

Ⅲ　調査の方法と経過 ……6

1．調査の方法 ……6

2．調査の経過 ……6

Ⅳ　基本層序 ……7

Ⅴ　検出された遺構と遺物 ……7

1．遺跡の概要 ……7

2．Ａｓ－Ｂ下間地 ……10

3．竪穴住居跡 ……10

4．竪穴状遺構 ……14

5．溝 ……14

6．ピット ……15

7．遺構外出土遺物 ……15

Ⅵ　まとめ ……33

写真図版

抄録・奥付

図版目次

第１図　調査区域図 ……1

第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡 ……3

第３図　基本層序 ……7

第４図　第１面全体図 ……8

第５図　第２面全体図 ……9

第６図　Ａｓ－Ｂ下間地 ……16

第７図　１号住居跡 ……17

第８図　２号住居跡カマド ……17

第９図　２号住居跡 ……18

第10図　３号住居跡 ……19

第11図　４号住居跡 ……20

第12図　５号住居跡 ……20

第13図　６号住居跡 ……21

第14図　７号住居跡 ……22

第15図　８号住居跡 ……23

第16図　９号住居跡 ……23

第17図　10号住居跡 ……24

第18図　11号住居跡カマド ……24

第19図　11号住居跡 ……25

第20図　１号竪穴状遺構 ……26

第21図　１・２号溝 ……27

第22図　３号溝 ……28

第23図　出土遺物実測図① ……29

第24図　出土遺物実測図② ……30

第25図　出土遺物実測図③ ……31

第26図　古墳時代の溝と集落分布図 ……34

第27図　集落変遷図 ……35

表 目 次

第１表　周辺遺跡一覧表 ……5

第２表　ピット一覧表 ……15

第３表　出土遺物観察表① ……31

第４表　出土遺物観察表② ……32

第５表　出土遺物観察表③ ……33

写真図版目次

ＰＬ．１　遺跡遠景
　１区全景
ＰＬ．２　２区全景
　２区Ａｓ－Ｂ下全景
ＰＬ．３　２区Ａｓ－Ｂ下間地検出状況
　１号住居跡掘り方
　２号住居跡全景
　２号住居跡カマド全景
　２号住居跡貯蔵穴
　２号住居跡掘り方
　２号住居跡柱穴断ち割り
　２号住居跡柱穴断ち割り
ＰＬ．４　３号住居跡全景
ＰＬ．４　３号住居跡カマド全景
　４号住居跡全景
　４号住居跡遺物出土状況
　４号住居跡炉土出土状況
　５号住居跡全景
　６・７号住居跡全景
　６号住居跡遺物出土状況
ＰＬ．５　７号住居跡Ｐ１遺物出土状況
　８号住居跡全景
　９号住居跡全景
　10号住居跡全景
　10号住居跡遺物出土状況
　11号住居跡全景
ＰＬ．５　11号住居跡貯蔵穴
　11号住居跡カマド全景
ＰＬ．６　11号住居跡カマド断ち割り
　１号竪穴状遺構全景
　１号溝全景
　２号溝全景
　３号溝全景
　１区基本土層
　２区基本土層
　調査状況
ＰＬ．７　出土遺物①
ＰＬ．８　出土遺物②

Ⅰ　調査に至る経緯

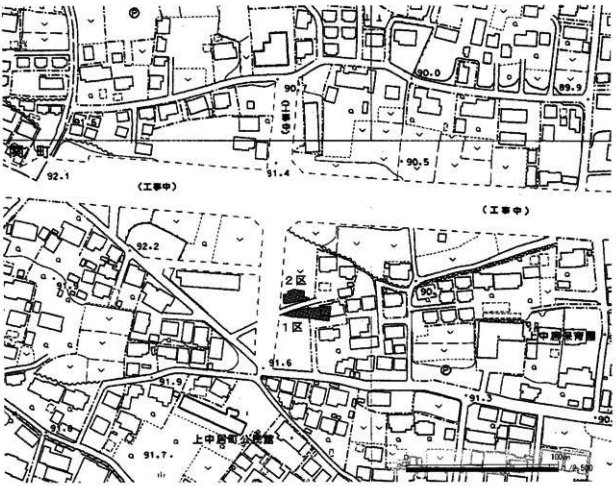
平成20年8月、設樂一郎氏（以下事業者）より高崎市教育委員会（以下市教委）に上中居町に計画する共同住宅建設予定地の埋蔵文化財の状況について照会があった。

市教委は、該当地隣接地において、区画整理事業や住宅建設に関わり古墳～平安時代の集落跡や中近世の館跡などが調査されており、周辺地域にも拡がる可能性が大きいことから、試掘調査による確認を行うことと、その結果による工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。

同年9月5日付けで事業者より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年10月3日に工事予定地の試掘調査を実施し、古墳時代の竪穴住居址と想定される遺構を複数確認した。

試掘結果を受けて、埋蔵文化財保護について事業者と協議を行ったが、建設予定の変更は不可能ということなので、記録保存の発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、有限会社毛野考古学研究所に委託して実施することとなり、平成20年11月14日付けで高崎市長・事業者・毛野考古学研究所の三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成21年3月23日付けで事業者と毛野考古学研究所の二者で発掘調査委託契約が締結された。



第1図　調査区域図

Ⅱ　地理的・歴史的環境

1．地理的環境（第２図）

上中居辻薬師遺跡は高崎市上中居町に所在する。高崎市は、群馬県のほぼ中央に位置し、北西に榛名山、北に子持山・小野子山、北東に赤城山を望むことができる。高崎市域の地形を概観すると、西部が岩野谷（観音山）丘陵と丘陵縁辺部の扇状地、烏川・碓氷川低地帯、北西部が若田・八幡台地、北部が榛名山南麓に発達する「相馬ヶ原扇状地」、これを南下すると比較的平坦な前橋台地となっている。前橋台地の中央付近には井野川が流れ、流域には段丘と谷底平野からなる井野川低地帯が広がっている。この低地帯を境にして西域を高崎台地という場合が多い。高崎台地は、およそ1.2万年前に堆積した浅間火山起源の軽石流により土台が形成され、この上に軽石に富み軟弱な十層の高崎泥流を特徴的に見ることができる。

上中居町は、この高崎台地上に所在している。現在の高崎台地は、市街化や圃場整備などにより自然の微地形はほぼ失われている。しかし、昭和初期までの古地図などから、烏川や井野川低地に接する地域はやや高く、一貫堀川のような小河川の流路周囲はやや低い地形となっていたことが識別でき、かつては多くの湧水を含めた小河川が網状に南流・東流し、微高地と低湿地とが混在する起伏に富む地形であったと捉えられている。なお、一貫堀川は、市の主要な灌漑用水路である「長野堰」が分流したものである。「長野堰」は烏川から取水されて沖町に始まり、下小塚町で一貫堀川に分流後、さらに高関町の円筒分水で地獄堰・矢中堰・倉賀野堰に分流して烏川や井野川へと注ぐ。本遺跡は、地獄堰と矢中堰に挟まれた東西に伸びる微高地上に位置している。

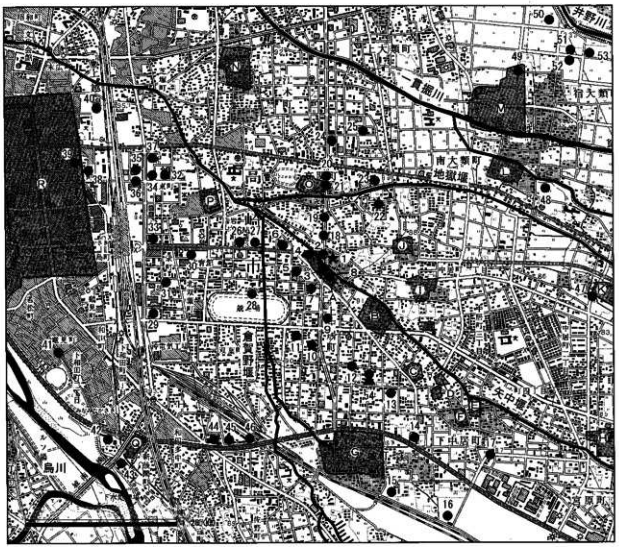
2．歴史的環境（第２図、第１表）

縄文時代　当該期は、岩野谷丘陵地帯や若田・八幡台地上、烏川・井野川の河岸段丘上などに遺跡が集中するため、前橋台地上での活動の痕跡は希薄である。しかし、本遺跡の南東約1.7㎞に位置する下中居条里遺跡（17）では、中期後半（加曽利Ｅ式期）の竪穴住居跡と土坑が検出されており、本台地上の微高地にも縄文の集落が形成されていた可能性がある。

弥生時代　前橋台地上で集落の存在が認められるのは、中期後半の中葉に入ってからである。烏川左岸の段丘上には、本地域における中期後半の標識遺跡として著名な竜見町遺跡（41）が、本遺跡の南西約0.6㎞には中期後半の土器を出土した鏡馬場遺跡（28）が所在する。

本遺跡周辺においては、中期後半の後葉段階に入ると城南小校庭遺跡（42）などで集落が確認され始める。当該期には農耕集落の存在が特筆され、北方約0.5㎞に位置する高関東神・村前遺跡（20）や高関堰村遺跡（21）、西方約2.2㎞に位置する高崎城遺跡で確認されている。中期後半の集落は後期初頭までの短期間で終息を迎え、集落数はほぼ半減する。その後、前葉までは大きな変動はなく、後葉になると再び集落が増加していく。後期の竪穴住居跡は高関村前遺跡（18）、高関東神・村前遺跡、高関堰村遺跡、下中居条里遺跡、宿大類町村西遺跡（49）などで確認されている。

生産遺構は、東町Ⅳ遺跡（35）でＡｓ－Ｃ（浅間Ｃ軽石：３世紀後半～４世紀初頭降下）下水田土壌の下層から、水路と想定される溝が検出されている。Ａｓ－Ｃ下水田跡は東町Ⅲ遺跡（34）と下中居条里遺跡で確認される。東町Ⅲ遺跡では、水田面から後期の薄式土器片に混じって中期末の竜見町式土器片が出土しており、中期にも水田が存在した可能性が考えられよう。これらの遺跡が所在する長野堰流域は、もともと自然河川が存在していたと考えられている。河川の流域を利用して水田開発がなされ、水路を整備しながら耕



第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡

地を拡大していった様子を窺うことができる。

墳墓は、烏川左岸段丘上の高崎城遺跡で、県内最古例の一つである中期後半の方形周溝墓が１基検出されている。

古墳時代　４世紀になると、Ｓ字状口縁台付甕を持つ住居が井野川・烏川・長野堰の下流域を中心に、市域全体へ広がってくる。下中居条里遺跡や宿大類町村西遺跡で竪穴住居跡が確認されたほか、高崎城遺跡でも前期の土器が多数出土しており、集落の存在が想起される。

墳墓は、井野川左岸段丘上に前方後方墳の元島名将軍塚古墳が存在し、隣接する鈴ノ宮遺跡では前方後方型の周溝墓が検出されている。本遺跡周辺では、上中居辻薬師Ⅱ遺跡（２）や西浦・吹手西遺跡（47）、宿大類町村西遺跡で方形周溝墓が確認されている。

４世紀末から５世紀初頭になると、烏川左岸の下流域に大型前方後円墳が造出する。本遺跡の南方約2.6kmには群馬県内第２位の規模を誇る浅間山古墳が、南方約3.1kmには大鶴巻古墳が築造される。大鶴巻古墳の北側には、５世紀後半前後の築造と考えられる小鶴巻古墳が位置する。さらに、本遺跡の南方約0.8kmには、現在は完全に湮滅しているが、大型前方後円墳の越後塚古墳（54）が存在しており、遅くとも５世紀末

葉以前の築造と推測されている。特に、本遺跡の南方に広がる下佐野町から倉賀野町にかけての烏川左岸段丘上は、かつて数百基にも及ぶ古墳群が存在しており、上野の拠点的地域であったといえる。

これに呼応して、５世紀後半になると市内各地で集落が増加していく。６世紀前半に数が減少するが、６世紀半ば以降は再び増加する。７世紀代は６世紀後半の集落が継続することが多い。上中居辻薬師Ⅱ遺跡、高関村前遺跡、高関村前Ⅱ遺跡、高関東沖・村前遺跡、高関堰村遺跡、新後閑寺廻遺跡（43）、双葉町Ⅰ遺跡（46）、高崎城遺跡などで集落が営まれている。

生産遺構は検出例が少ない。水田開発は、弥生時代から引き続き水路の整備が進められたと考えられる。下中居条里遺跡では、４世紀後半の井戸から広鍬の未製品が出土し、水田の存在が示唆される。上中居辻薬師Ⅱ遺跡では、Ｈｒ－ＦＡ（榛名－渋川テフラ：６世紀初頭降下）およびＨｒ－ＦＰ（榛名－伊香保テフラ：６世紀中葉降下）関連の洪水層で埋没した大型水路が検出されている。島跡は、高関村前遺跡で２面検出されており、それぞれ４世紀～６世紀中葉と６世紀中葉～８世紀の幅で捉えられる。

奈良・平安時代　奈良時代の遺構は、本遺跡周辺ではあまり知られていない。高関村前遺跡で８世紀代の住居跡が１軒検出されたのみだが、近隣の溝から土器が多数出土しており、集落の存在が予想されよう。奈良・平安時代の大集落である宿大類町村前遺跡でも、奈良時代に属するものは少なく、平安時代になってから急激に住居の数を増している。平安時代の集落は下中居条里遺跡、西浦・欠手西遺跡、南大類村南遺跡（48）、村東遺跡（52）、高崎城遺跡などで確認されている。山島・天神遺跡（53）では掘立柱建物跡などが検出されている。

高崎台地上では、小河川沿いにＨｒ－ＤＡ・ＦＰ関連の洪水層が随所で見られ、これに関わる水田跡が検出されている。下中居条里遺跡では洪水層の下から両側に畦畔を持つ溝が検出された。東町Ⅲ遺跡ではＨｒ－ＦＰ関連洪水層の下から畦畔を持つ水路が検出され、これはＨｒ－ＦＡ関連洪水層を切り開いて掘削されている。また、東町Ⅳ遺跡（35）では８世紀代と想定される洪水層の下から、旭町Ⅰ遺跡（38）・真町Ⅰ遺跡（39）では９世紀代の洪水層の下から水田跡が検出された。Ｈｒ－ＦＡ・ＦＰ関連の洪水は複数回起こったと考えられており、今後、古墳時代から平安時代後半までの農耕遺構が検出される可能性は高いと考えられる。

Ａｓ－Ｂ（浅間Ｂ軽石：1108年降下）に覆われた水田跡は、上中居辻薬師遺跡（３）、上中居平塚遺跡（５・６）、上中居西屋敷遺跡（７・９）、上中居荒神遺跡（10・11）、上中居咲地蔵遺跡（12）、上中居魚薬師遺跡（13）、下之城村前Ⅱ遺跡（15）、下中居条里遺跡、高関村前Ⅱ遺跡、高関岡久保遺跡（22）、高関北神遺跡（24）、高関塚田遺跡（25）、岩押町遺跡（26・27）、栄町遺跡（29～31）、東町遺跡（32～37）、双葉町Ⅰ遺跡、旭町Ⅰ遺跡、真町Ⅰ遺跡、江木飯訪西遺跡（40）、和田多中遺跡（44）、上佐野舘越遺跡（45）、宿大類町村西遺跡、山島・天神遺跡、村北遺跡（50）、矢島前遺跡（51）、村東遺跡など、広範囲で検出されている。

中世　長野堰下流域に城館や屋敷屋敷が点在する。本遺跡の南方約0.1kmに位置する反町城（Ａ）もその一つである。和田氏の家臣反町大膳亮定の屋敷址と言われ、上中居辻薬師遺跡や上中居西屋敷Ⅱ遺跡（８）で堀と郭が調査された。また、上中居辻薬師Ⅱ遺跡では小規模な屋敷地と水路が検出された。水路は現在の矢中堰と方向が一致しており、旧道の可能性がある。そのほか、和田城の支城である和田下之城址（Ｇ）や大類城址（Ｍ）、新堀砦（Ｂ）、高関屋敷（Ｏ）、岡田屋敷（Ｐ）などがある。また、山島・天神遺跡では、集落と想定される掘立柱建物群が検出されている。

近世　17世紀初めに烏川左岸に高崎城（Ｒ）が置かれ、その城下町として発展するとともに、中山道の宿場町としても栄えた。また、天明３（1783）年の浅間山大噴火により浅間Ａ軽石が広範囲に降下し、市域は甚大な被害を受けたと考えられる。その復旧作業の痕跡が栄町Ⅱ遺跡などの各遺跡で検出されている。

No.	遺跡名	遺跡の主な時期・性格	文献
1	上中辺江南原遺跡	古墳前～後期集落・窯	本報告
2	上中野辻東原Ⅱ遺跡	古墳前期用途墓、古墳後期水銀・朱鉄、中世掘立・柵・土坑墓	『上中興辻東原Ⅱ遺跡』1992 高崎市
3	上中辺江南原遺跡	B下水田、中世掘建	『上中辺江南原遺跡』1989 高崎市
4	上中辺草津遺跡	中近世屋・井戸	『上中辺草津遺跡』1992 高崎市
5	上中野平原Ⅰ遺跡	B下水田	『上中興平原Ⅰ遺跡』1996 高崎市遺跡調査会
6	上中興平原Ⅱ遺跡	B下水田	『上中興平原Ⅱ遺跡』1996 高崎市遺跡調査会
7	上中興西辺堂遺跡	B下水田	『上中興西辺堂遺跡』1994 高崎市遺跡調査会
8	上中興西辺堂Ⅱ遺跡	中近世屋・井戸	『上中辺西辺堂Ⅱ遺跡』1997 高崎市
9	上中辺西辺堂遺跡	B下水田	『上中辺西辺堂遺跡』1998 高崎市遺跡調査会
10	上中辺荒神Ⅰ遺跡	B下水田	『上中辺荒神Ⅰ遺跡』1997 高崎市遺跡調査会
11	上中辺荒神Ⅱ遺跡	B下水田、中近世水路	『平成2年度高崎市小規模開発文化財発掘調査概報』1998 高崎市
12	上中辺城跡遺遺跡	B下水田	『高崎市遺跡分布地図』1998 高崎市
13	上中興島原遺遺跡	B下水田	『上中興島原遺遺跡』1997 高崎市遺跡調査会
14	下之城村北Ⅱ遺跡	B下水田	『下之城村北Ⅱ遺跡』下之城村埋蔵遺跡』1992 高崎市
15	下之城村北Ⅲ遺跡	B下水田	『下之城村北Ⅲ遺跡』1996 高崎市遺跡調査会
16	下之城村東遺跡	B下水田	『下之城村東遺跡』1988 下之城村東遺跡調査会
17	下中興条里遺跡	調査区域、C下水田、古墳前～中世住居、弥生住居、B下水田、中世掘建	『下中興条里遺跡』1996 高崎市
18	高関村前遺跡	弥生後期住居、古墳後期住居・古墳前期、中世掘立・水路・井戸	『高関村前遺跡』1993 高崎市
19	高関村前Ⅱ遺跡	古墳後期住居、B下水田、中近世掘立・水路・井戸	『高関村前Ⅱ遺跡 高関東神・村前遺跡』1995 高崎市
20	高関東神・村前遺跡	弥生中・後期住居、古墳後期住居	『高関村前Ⅱ遺跡 高関東神・村前遺跡』1995 高崎市
21	高関堀村遺跡	弥生中期集落、古墳住居	『高関堀村遺跡』1992 高崎市
22	唐箕国久保遺跡	B下水田	『国久保遺跡』1988 高崎市
23	高関東神Ⅱ遺跡	B下水田	『高関東神Ⅱ遺跡』1995 高崎市遺跡調査会
24	高関宝沢遺跡	B下水田	『高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査概報 平成3年度』1991 高崎市
25	高関宝沢遺跡	B下水田	『高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査概報 平成3年度』1991 高崎市
26	阿内町Ⅱ遺跡	B下水田	『石神町Ⅰ遺跡』1994 高崎市遺跡調査会
27	石神町Ⅱ遺跡	B下水田	『石神町Ⅱ遺跡』1996 高崎市遺跡調査会
28	鞍掛東遺跡	弥生中期土坑	『群馬県東遺跡分布図Ⅱ（西毛編）』1972 群馬県教育委員会
29	柴町Ⅰ遺跡	B下水田	『柴町Ⅰ遺跡』1996 高崎市遺跡調査会
30	柴町Ⅱ遺跡	B下水田	『柴町Ⅱ遺跡』1999 高崎駅東口線公町遺跡調査会
31	南町遺跡	B下水田	『南町遺跡』2003 高崎市
32	東町遺跡	B下水田	『東町遺跡』1989 高崎市
33	東町Ⅱ遺跡	B下水田	『東町Ⅱ遺跡』1991 高崎市
34	東町Ⅲ遺跡	弥生期、C下水田、PA間第二次流水路下水田、B下水田	『東町Ⅲ遺跡』1994 高崎市
35	東町Ⅳ遺跡	弥生期、PA・PV間第二次流水路下水田、B下水田、中近世溝	『東町Ⅳ遺跡』1995 高崎市
36	東町Ⅴ遺跡	B下水田	『東町Ⅴ遺跡』1996 高崎市
37	東町Ⅵ遺跡	B下水田	『東町Ⅵ遺跡』2000 高崎市遺跡調査会
38	矩町Ⅰ遺跡	9C後半竪下水田、B下水田	『平成7年度高崎市内小規模開発文化財発掘調査概報』1996 高崎市
39	萬町Ⅰ遺跡	9C後半竪下水田、B下水田、近現代下町	『萬町Ⅰ遺跡』1996 高崎市
40	江木原遺跡	古墳期、B下水田	『江木原遺跡調査報告』1995 高崎市遺跡調査会
41	電見町遺跡	弥生中期（中期第4・電見町式）竪穴遺構	『群馬県遺跡分布図Ⅱ（西毛編）』1972 群馬県教育委員会
42	城南小校遺遺跡	弥生中期住居	『城南小校遺遺跡』1973 高崎市
43	新張御寺遺跡	古墳～平安住居	『高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査概報 第1集』1990 高崎市
44	高田多中遺跡	B下水田	『高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査概報 第1集』1990 高崎市
45	上佐野稲荷遺跡	B下水田	『上佐野稲荷遺遺跡』2002 群馬県埋蔵文化財調査事業団
46	反町Ⅰ遺跡	古墳後期住居・溝、B下水田	『反町Ⅰ遺跡』1996 高崎市遺跡調査会
47	西原・吹手戸遺跡	古墳前期用途墓、平安住居、B下水田	『西原・吹手戸遺跡』1991 高崎市
48	南大類村前遺跡	中世住居、中世井戸・堀・土坑	『天田遺跡Ⅱ』1991 高崎市
49	雷大類村西遺跡	縄文竪穴状遺構、弥生後期住居、古墳前期住居・方形周溝墓、奈良・平安住居・溝等、B下水田、中世掘建	『雷大類村西遺跡』1997 高崎市遺跡調査会
50	村北遺跡	B下水田、中世館址・土坑墓	『村北・矢島前・村東遺跡』1985 高崎市
51	矢島前遺跡	B下水田	『村北・矢島前・村東遺跡』1985 高崎市
52	村東遺跡	弥生住居、B下水田	『村北・矢島前・村東遺跡』1985 高崎市
53	山島・天神遺跡	縄文前期住居、奈良・平安掘立・水路、B下水田、中世館址・土坑墓	『山島・天神遺跡』1984 高崎市
54	鞍掛窯古墳	前方後円墳（5C）	『新編高崎市史資料編1 原始古代1』2000 高崎市
A	浜町城	中世城（単郭）	『上中辺江南原遺跡』1989 高崎市、『上中野辻東原Ⅱ遺跡』1992 高崎市
B	新堀館	中世館（板碧）	『群馬県古墳総覧の研究』上 1972 山崎一
C	下中興新井屋敷	中世屋敷（開発）	『群馬県古墳総覧の研究』上 1972 山崎一
D	高関足屋	中世屋敷（単郭）	『群馬県古墳総覧の研究』上 1972 山崎一
E	上中辺低部屋敷	中世屋敷（板碧）	『群馬県古墳総覧の研究』上 1972 山崎一
F	下中興低部屋敷	中世屋敷（開発）	『群馬県古墳総覧の研究』上 1972 山崎一
G	和田下之城	中世城（開発）	『下之城村東遺跡』1983 下之城村東遺跡調査会
H	黒瀬城	中世屋敷（複郭）	『群馬県古墳総覧の研究』上 1972 山崎
I	雪名宮殿遺遺跡	中世館（板碧）	『新編高崎市史資料編3 中世1』1996 高崎市
J	矢尾屋敷	中世城館屋敷（複郭）	『群馬県歴史散歩』75 号 1986 山崎一
K	高井屋敷	中世屋敷（複郭）	『群馬県古墳総覧の研究』上 1972 山崎
L	大櫻跡	中世館屋敷（単郭）	『新編高崎市史資料編3 中世1』1996 高崎市
M	大類城	中世城（板碧）	『雷大類村村西遺跡』1997 高崎市
N	江木原遺遺構	中世屋敷屋敷跡	『新編高崎市史資料編3 中世1』1996 高崎市
O	高関足屋	中世屋敷屋敷（複郭）	『高関堀村遺跡』1992 高崎市
P	岡田城跡	中世館城屋敷（開発）	『高崎漫歩』1989 上野春英
Q	新張関屋敷	中世屋敷屋敷（単郭）	『群馬県歴史散歩』75 号 1986 山崎
R	高崎（和田）城	中近世城（高崎城跡説解、和田城跡説解不明）	『高崎城址・区 高崎城三ノ丸遺跡』1994 高崎市遺跡

第１表　周辺遺跡一覧表

Ⅲ　調査の方法と経過

1．調査の方法

本調査区は、旧道路部分を境に南北２ヵ所に分かれ、南側を１区、北側を２区と呼称した。表土掘削は重機を用いて遺構確認面まで掘り下げた。遺構確認面は、１区は古墳時代遺構確認面（Ⅵ層）上面、２区はＡｓ－Ｂ一次堆積層直下面（Ⅳ層）と古墳時代遺構確認面（Ⅵ層）上面の２面とした。

確認された遺構は、移植ゴテを使用して掘り下げた。遺構掘削にあたっては、上層観察用のベルトを設定し、埋没状態や構築状態を確認した。図面・写真による記録は、上層断面・遺物出土状態・完掘状態・掘り方などの各段階で行った。遺構図は縮尺１/20を基本とし、カマドなどの微細図は１/10、全体図は１/100で作図した。平面図についてはトータルステーションを用い、断面図は手実測で対応した。写真撮影には、35㎜白黒ネガ・35㎜カラーリバーサルフィルム、デジタルカメラを用いた。航空写真はラジコンヘリコプターを用いて撮影した。調査終了後は重機による埋め戻しを行った。

2．調査の経過

現地での発掘調査は平成20年11月19日～同年12月27日の間で実施した。

11月19日：発掘器材の搬入。

11月20日：プレハブ・簡易トイレの搬入。基準点の設置。１区から表土掘削を開始する。

11月21日：１区の表土掘削を行う。発掘補助員の動員。遺構確認作業を行い、竪穴住居跡・溝などのプランを確認する。

11月25日：２区の表上掘削を行う。１区溝の掘削に着手する。

11月26日：２区Ａｓ－Ｂ一次堆積層を人力で除去し、平安時代末期地表面（第１面）の検出を行う。（～27日）

12月１日：２区第１面の検出作業を終了する。

12月２日：１区竪穴住居跡の測量に取りかかる。重複が著しいため、サブトレンチを入れて新旧関係の把握に努めた。

12月３日：１区竪穴住居跡の調査を継続する。（～５日）

12月８日：２区第１面の測量を行う。

12月９日：２区に３本の南北トレンチを設定し、第２面目までの深さを確認する。

12月10日：１区竪穴住居跡の調査を継続。

12月11日：重機により２区の第２面目までの掘削をし、並行して遺構確認作業を行う。

12月12日：１区竪穴住居跡の測量を継続する。

12月15日：２区溝・竪穴住居跡の調査を行う。（～16日）

12月17日：２区竪穴住居跡の調査を行う。

12月18日：１・２区竪穴住居跡の調査を行う。１区基本層序の掘り下げを行う。（～19日）

12月22日：全体清掃の後、空撮を行う。空撮終了後、測量を実施する。

12月24日：１・２区竪穴住居跡の掘り方調査および測量を行う。（～25日）

12月26日：器材およびプレハブ・簡易トイレの搬出。重機により調査区内の埋め戻しを行う。

12月27日：調査区内の埋め戻しを行い、現地での調査を終了する。

Ⅳ　基本層序（第３図、ＰＬ．６）

１区の北壁中央および、２区の南西端にテストピットを設け、基本層序を確認した。試掘調査では、Ⅴ層を若干掘り込んだ所で平安時代の遺構が、Ⅵ層上面で古墳時代の遺構が確認されていた。しかし、本調査ではⅤ層中での遺構検出が困難であったため、Ⅵ層上面で遺構検出を行った。層序については以下のとおりである。

Ⅰa　にぶい黄褐色上層：盛土層。φ２～５㎝の礫を多量含む。しまりややあり。粘性中弱。

Ⅰb　黄灰色土層：表土層。白色粒を少量含む。鉄分沈着。しまり硬。粘性ややあり。

Ⅱ　黒褐色上層：Ａｓ－Ｂ（浅間Ｂ軽石：1108年降下）・鉄分を多量含む。しまりあり。粘性ややあり。

Ⅲ　Ａｓ－Ｂ　二次堆積層。

Ⅳ　黒色粘質土層：白色粒・橙色粒を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。平安時代末期の地表面。２区第１面の遺構確認面。

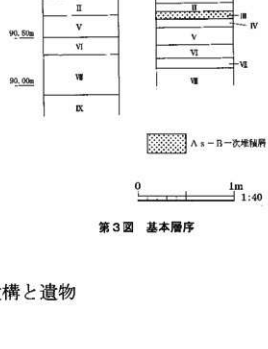
Ⅴ　黒褐色土層：白色粒を多量、橙色粒を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。古墳時代の遺物包含層。

Ⅵ　暗褐色土層：礫を多量、白色粒・橙色粒を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。１・２区第２面の遺構確認面。

Ⅶ　灰黄褐色土層：白色粒・明黄褐色粒・礫を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。

Ⅷ　黄橙色粘質土層：礫を少量、砂分を微量含む。しまりあり。粘性ややあり。

Ⅸ　にぶい黄橙色粘質上層：φ0.2～５㎝の砂礫を多量含む。しまり・粘性あり。



第３図　基本層序

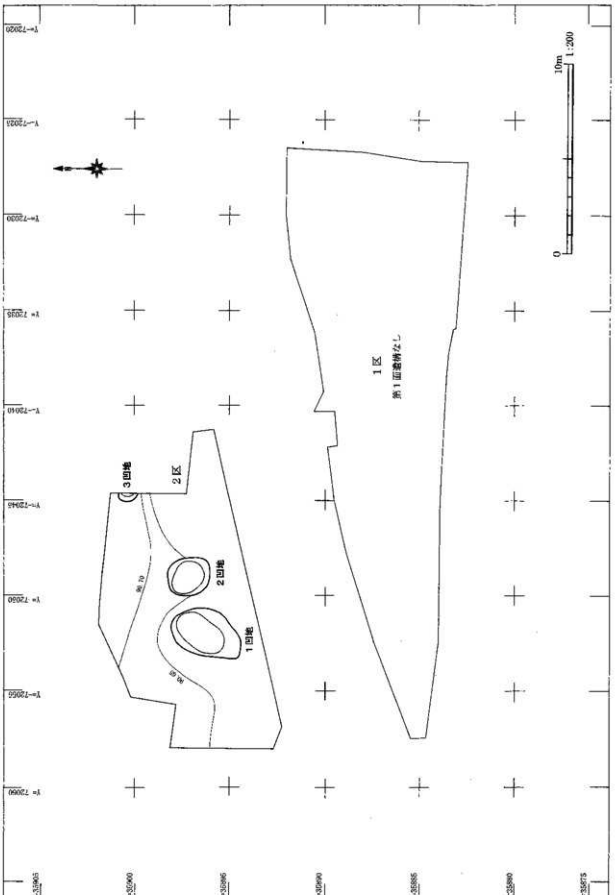
Ⅴ　検出された遺構と遺物

１．遺跡の概要（第４・５図、ＰＬ．１・２）

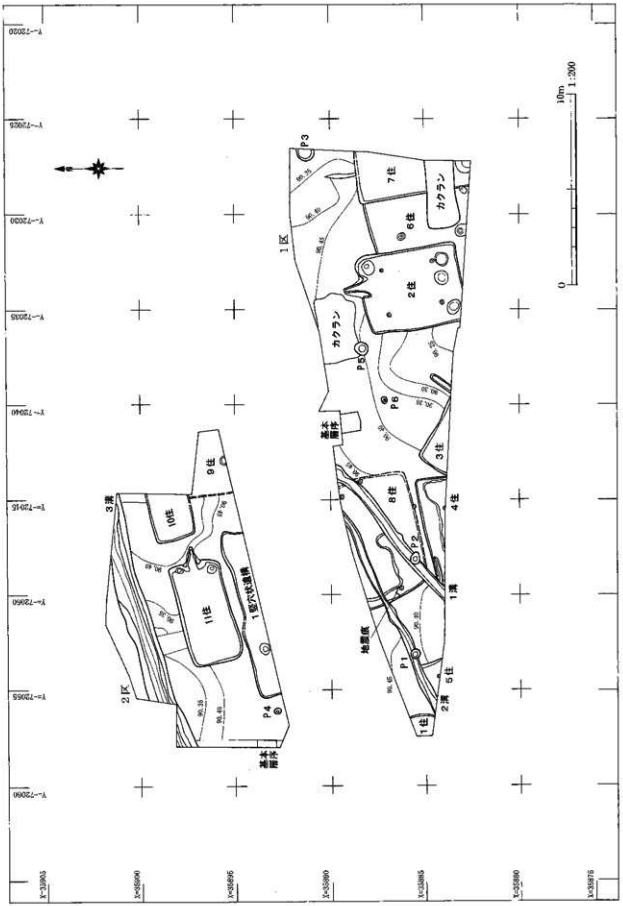
第１面では、２区でＡｓ－Ｂ　二次堆積層直下の地表面が検出された。３ヵ所の凹地が確認され、この内２ヵ所は第２面の竪穴住居跡の存在を示すものであった。前橋台地上にはＡｓ－Ｂ下の水田跡が広範囲で検出されているが、微高地の中でも高い位置にある本遺跡では水田耕作は行われなかったと推測される。

第２面では、竪穴住居跡11軒・竪穴状遺構１基・溝３条・ピット６基が確認された。竪穴住居跡は古墳時代が主体で、前期後半（６号住居跡）、中期後半（３・４・７・９号住居跡）、７世紀代（２・10・11号住居跡）に比定される。カマドは中期後半と７世紀代の竪穴住居跡で確認され、北壁および東壁に付設されている。溝は重複関係や埋没状態から、１・３号溝が古墳時代後期以降、２号溝が奈良・平安時代以降の掘削と想定され、全てＡｓ－Ｂ降下以前に埋没している。遺物は土師器・須恵器が出土し、遺構外からは縄文土器・弥生土器・石器が確認されている。

また、地震による液状化現象の痕跡（噴砂）が１区の西側で１ヵ所検出された。噴砂は古墳時代の８号住居跡の掘り方を抜けて、Ⅵ層のドまで達している。本遺跡の北西に位置する高関村前遺跡・高関村前Ⅱ遺跡でも噴砂が確認されており、弘仁９（818）年の地震による可能性が有力とされている。



第４図　第１面全体図


1区
2区
1住
2住
3住
4住
5住
6住
7住
8住
9住
10住
11住
カクラン
カクラン
1溝
2溝
3溝
1竪穴遺構
地面炉
基本層序
基本層序
P1
P2
P3
P4
P5
P6
0
10m
1:200

第５図　第２面全体図

2．Ａｓ－Ｂ下凹地（遺構：第６図、ＰＬ．２・３）

Ａｓ－Ｂ層は２区にのみ残存しており、Ａｓ－Ｂ層のド部に薄い火山灰が確認されたため一次堆積と判断した。６～12 cm程の堆積が認められ、丁寧に除去したところ平安時代末期の地表面が検出された。地表面は平坦でなだらかであり、大型の凹地が３ヵ所検出された。ほかにも長径10～15 cm程のごく浅い凹みが所々に見られるが、人馬の足跡などは確認できなかった。

凹地の規模は、１号凹地が長径3.92 m、短径2.49 m、最深３cm、２号凹地が長径2.20 m、短径1.97 m、最深５cm、３号凹地が長径0.99 m、短径0.45 m以上、最深1.5 cmである。この内、１・２号凹地は第２面の11号住居跡の存在を示すものである。11号住居跡は７世紀代に比定されるもので、１号凹地が住居の中央部に、２号凹地がカマド部分に相当する。

遺物は、２号凹地を中心として、土師器のＳ字状口縁台付甕・内斜口縁坏・甕、須恵器の甕などの小片が散見された。総重量は602 gである。土器以外には、長径２～７cm程の安山岩が散在していた。右の総重量は1,015 gで、使用痕や加工痕は見られなかった。

3．竪穴住居跡

１号住居跡（遺構：第７図、ＰＬ．３）

位置：１区西端に位置し、北・西・南側は調査区外となる。**平面形**：部分的な検出のため不明である。**規模**：南北軸1.28 m以上、東西軸1.04 m以上。**残存深度**：壁面で確認した床面までの深さは28 cmである。**主軸方位**：Ｎ－４°－Ｗ。**床面の状態**：ほぼ平坦である。硬化面は調査区内では確認されない。貼床で、黄橙色粒を含む明褐灰色土が埋め戻されており、12～20 cmの掘り方を有する。**埋没状態**：明褐灰色土を主体とする自然埋没と推定される。**遺物**：出土しなかった。**時期**：古墳時代の遺物包含層であるＶ層を掘り込んで構築されていることから、奈良・平安時代と推測される。

２号住居跡（遺構：第８・９図、ＰＬ．３／遺物：第23図、第３表、ＰＬ．７）

位置：１区東側に位置し、南西角は調査区外となる。**重複**：６号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。**平面形**：長方形を呈する。**規模**：南北軸5.14 m、東西軸4.07 m。**残存深度**：確認面から床面までの深さは20 cmである。**主軸方位**：Ｎ-13°－Ｗ。**床面の状態**：ほぼ平坦である。硬化面は壁下を除いて確認された。貼床で、明黄橙色土ブロックを含む黒褐色土が埋め戻されており、２～14 cmの掘り方を有する。掘り方は、住居周縁が帯状に深く掘り込まれ、中央部には多数の小穴（長径24～68 cm、深さ21～39 cm）が見られる。なお、中央部には長径180 cm、深さ27 cmの隅丸長方形の大穴があり、この穴にだけ焼土と炭化物が多量に含まれている。**貯蔵穴**：住居北東角、カマドの右脇に位置する。楕円形を呈し、規模は長径72 cm、短径62 cm、深さは58 cmである。遺物は出土していない。**柱穴**：Ｐ１～４が対角線上に位置し、主柱穴に相当する。規模は、Ｐ１が長径16 cm、短径14 cm、深さ43 cm、Ｐ２が長径24 cm、短径20 cm、深さ39 cm、Ｐ３が長径22 cm、短径21 cm、深さ50 cm、Ｐ４が長径20 cm、短径20 cm、深さ54 cmである。柱穴の深さは、西側に比べると東側が浅めである。**小穴**：Ｐ５～７の３本が検出された。規模は、Ｐ５が長径75 cm、短径70 cm、深さ12 cm、Ｐ６が長径82 cm、短径61 cm、深さ11 cm、Ｐ７が長径73 cm、短径71 cm、深さ12 cmである。３本とも同程度の規模と深さである。**カマド**：北壁のやや東寄りに付設される。全長158 cm、燃焼部幅47 cmである。煙道部は燃焼部奥から緩やかに傾斜して立ち上がる。煙道部底面および壁面は一部赤色化している。支脚の痕跡は見られなかった。袖はにぶい黄褐色粘質土を主体として構築されている。両袖下からは長径42 cm、深

さ 22 ～ 25 ㎝の小穴が検出された。小穴には焼土・灰を含むにぶい黄褐色土が堆積しており、抽芯材を抜いて埋めた痕跡と推測される。なお、右袖側には黒色の灰が円形に広がっている。**埋没状態**：黒褐色土を主体とする自然堆積と推定される。**遺物**：土師器の坏・高坏・小型壺・甕・壺・甑、須恵器の甕が出土した。総重量は 5,423 g である。ほとんど小片で、土師器甕が多い。 1 ～ 4 は床面直上からの出土である。掘り方からも多くの小片が出土し、特に住居中央から北側にかけて集中する。土器以外では、床面から 2 ～ 10 ㎝浮いた位置で拳大の自然礫が多数見られた。床面付近からは 5 の棒状礫や 6 の薄編石が出土している。**時期**：出土遺物から、7 世紀前半に比定される。

3 号住居跡（遺構：第 10 図、ＰＬ．4）

位置：1 区中央の南壁際に位置し、南側は調査区外となる。**平面形**：方形または長方形を呈すと推測される。**規模**：南北軸 1.60 m以上、東西軸 3.94 m以上。**残存深度**：壁面で確認した床面までの深さは 45 ㎝である。**主軸方位**：N -30° - E。**床面の状態**：ほぼ平坦である。調査区内では硬化面は確認されない。貼床で、明黄褐色土ブロックを含む黒褐色土が埋め戻されており、3 ～ 5 ㎝の掘り方を有する。**カマド**：北東壁に付設される。煙道部のみの検出となり、残存長 129 ㎝、幅 30 ～ 32 ㎝である。煙道部は燃焼部寄りの内壁が赤色化し、底面の地山も鈍く変色している。埋没土下層には黒色の灰が堆積する。その上面に確認される焼土は、赤色化した犬井材の崩落と考えられる。また、煙道部から出土した土師器甕胴部片には、外面に焼けた粘土が付着しており、カマド構築材に甕が使用された可能性を示している。**埋没状態**：黒褐色土を主体とする自然埋没と推定される。7 層のような壁材の崩落と想定される土層も認められた。**遺物**：土師器の坏・坩・高坏・甕・壺・甑が出土した。総重量は 760 g で、土師器甕の割合が多い。全て小片で図示できるものはない。**時期**：内斜口縁坏や内湾口縁坏、「く」の字に外反する甕などが認められることから、古墳時代中期後半（5 世紀後半）に比定される。

4 号住居跡（遺構：第 11 図、ＰＬ．4 ／遺物：第 23 図、第 3 表、ＰＬ．7）

位置：1 区中央より西側の南壁際に位置し、南側は調査区外となる。**重複**：1 号溝と重複し、本住居跡が古い。**平面形**：方形または長方形を呈すと推測される。**規模**：南北軸 1.57 m以上、東西軸 5.68 m以上。**残存深度**：不明である。**主軸方位**：N -12° - W。**床面の状態**：ほぼ平坦である。調査区内では硬化面は確認されない。貼床で、明黄褐色砂質土を含む黒褐色土が埋め戻されており、4 ～ 28 ㎝の掘り方を有する。掘り方は、壁下を帯状に深く掘り込む形状である。**小穴**：掘り方からＰ 1 が検出された。直径 18 ㎝、床面からの深さは 31 ㎝である。**埋没状態**：床面および掘り方のみの検出のため、埋没状態は不明である。**遺物**：北壁から約 13 ㎝内側の床面直上で、土師器の内斜口縁坏と赤土が出土した。赤土は長径 12 ㎝、短径 9.5 ㎝の不整形で、厚さは 1 ㎜程度である。掘り方からは土師器の坏・坩の小片がわずかに出土した。総重量は 226 g である。**時期**：出土遺物から、古墳時代中期後半（5 世紀後半）に比定される。

5 号住居跡（遺構：第 12 図、ＰＬ．4）

位置：1 区西側に位置し、南側は調査区外となる。**重複**：2 号溝と重複し、本住居跡が古い。**平面形**：方形または長方形を呈すと推測される。**規模**：南北軸 1.12 m以上、東西軸 1.72 m以上。**残存深度**：壁面で確認した床面までの深さは 26 ㎝である。**主軸方位**：N -21° - W。**床面の状態**：ほぼ平坦である。調査区内では硬化面は確認されない。貼床で、黄橙色砂質土・小礫を含む黒褐色土が埋め戻されており、12 ～ 16 ㎝の掘

り方を有する。**小穴**：掘り方からＰ１が検出された。直径 17 ㎝、床面からの深さは 27 ㎝である。**埋没状態**：黒褐色土を主体とする自然埋没と考えられる。**遺物**：掘り方から土師器甕の小片がわずかに出土した。総重量は 67 ｇである。全て小片で図示できるものはない。**時期**：古墳時代の遺物包含層であるＶ層を掘り込んで構築されていることから、奈良・平安時代と推測される。

６号住居跡（遺構：第 13 図、ＰＬ．４／遺物：第 23 図、第３表、ＰＬ．７）

位置：１区東側に位置し、南側は調査区外となる。**重複**：２・７号住居跡と重複し、本住居跡が古い。南東側を現代の攪乱に壊されている。**平面形**：方形または長方形を呈すと推測される。**規模**：南北軸 5.26 ｍ以上、東西軸 5.24 ｍ以上。**残存深度**：壁面で確認した床面までの深さは 17 ㎝である。**主軸方位**：Ｎ -17°－Ｗ。**床面の状態**：ほぼ平坦である。東側で顕著な硬化面が確認された。貼床で、にぶい黄橙色土を含む暗褐色土が埋め戻されており、５～ 14 ㎝の掘り方を有する。**小穴**：Ｐ１～３の３本が検出された。規模は、Ｐ１が長径 65 ㎝、短径 60 ㎝以上、深さ 44 ㎝、Ｐ２が長径 42 ㎝、短径 32 ㎝、深さ 36 ㎝、Ｐ３が長径 43 ㎝、短径 30 ㎝、深さ 44 ㎝である。**埋没状態**：黒褐色土を主体とする自然埋没と推定される。**遺物**：土師器の坩・小型甕・Ｓ字状口縁台付甕・単口縁台付甕・蓋が出土した。総重量は 1,248 ｇで、Ｓ字状口縁台付甕の破片が大半を占める。１の小型甕や２のＳ字状口縁台付甕は、床面直上からの出土である。**時期**：出土遺物から、古墳時代前期後半（４世紀後半）に比定される。

７号住居跡（遺構：第 14 図、ＰＬ．４・５／遺物：第 24 図、第４表、ＰＬ．８）

位置：１区東壁際に位置し、南・東側は調査区外となる。**重複**：６号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。南側を現代の撹乱に壊される。**平面形**：方形または長方形を呈すと推測される。**規模**：南北軸 5.96 ｍ以上、東西軸 2.65 ｍ以上。**残存深度**：壁面で確認した床面までの深さは 18 ㎝である。**主軸方位**：Ｎ－９°－Ｗ。**床面の状態**：ほぼ平坦である。調査区内では硬化面は確認されない。貼床で、にぶい黄橙色土・小礫を含む暗褐色土が埋め戻されており、２～ 12 ㎝の掘り方を有する。**小穴**：南西壁付近でＰ１が検出された。規模は長径 82 ㎝以上、短径 62 ㎝以上、床面からの深さ 34 ㎝である。底面付近から、ほぼ完全な状態の土師器甕が横倒しで出土した。**埋没状態**：黒褐色土を主体とする自然埋没と推定される。**遺物**：土師器の坏・甕・壺・甑が出土した。総重量は 2,249 ｇである。１の甕以外は小片である。**時期**：出土遺物から、古墳時代中期後半（５世紀後半）に比定される。

８号住居跡（遺構：第 15 図、ＰＬ．５）

位置：１区中央より西側の北壁際に位置し、北側は調査区外となる。**重複**：１・２号溝およびと２号ピットと重複し、本住居跡が古い。**平面形**：方形または長方形を呈すと推測される。**規模**：南北軸 3.66 ｍ以上、東西軸 6.50 ｍ。**残存深度**：不明である。**主軸方位**：Ｎ -13°－Ｗ。**床面の状態**：掘り方のみの検出のため、不明である。貼床で、明黄褐色土ブロックを含む黒色土が埋め戻されており、２～ 17 ㎝の掘り方を有する。掘り方は、西壁周辺を帯状に深く掘っている。**小穴**：Ｐ１～３の３本が検出された。規模は、Ｐ１が長径 24 ㎝、短径 20 ㎝、深さ 33 ㎝、Ｐ２が長径 24 ㎝、短径 21 ㎝、深さ 41 ㎝、Ｐ３が長径 24 ㎝、短径 24 ㎝、深さ９㎝である。**埋没状態**：掘り方のみの検出のため、埋没状態は不明である。**遺物**：土師器の坏・坩・Ｓ字状口縁台付甕・甕の小片が出土した。総重量は 248 ｇで、５～６世紀代の坏や甕が多い。全て小片で図示できるものはない。**時期**：出土遺物から、古墳時代と推測される。

9号住居跡（遺構：第16図、ＰＬ．５／遺物：第24図、第４表、ＰＬ．８）

位置：２区東端に位置し、北・南・東側は調査区外となる。**重複**：10号住居跡と重複し、本住居跡が古い。**平面形**：方形または長方形を呈すと推測される。**規模**：南北軸2.29ｍ以上、東西軸3.31ｍ以上。**残存深度**：壁面で確認した床面までの深さは15㎝である。**主軸方位**：Ｎ－６°－Ｗ。**床面の状態**：ほぼ平坦である。調査区内では硬化面は確認されない。掘り方はなく、Ⅶ層を直接床面としている。**小穴**：Ｐ１が検出された。規模は長径48㎝、短径30㎝以上、床面からの深さ13㎝である。**埋没状態**：黒褐色土を主体とする自然埋没と推定される。**遺物**：土師器の坏・直口壺・甕が出土した。総重量は940ｇで、１を除くと小片のみである。１の直口壺は、ほぼ完全な状態で床面直上から出土した。**時期**：出土遺物から、古墳時代中期後半（５世紀後半）に比定される。

10号住居跡（遺構：第17図、ＰＬ．５／遺物：第24図、第４表、ＰＬ．８）

位置：２区東側に位置し、東側は調査区外となる。**重複**：９号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。**平面形**：長方形を呈すと推測される。**規模**：南北軸2.08ｍ、東西軸2.52ｍ以上。**残存深度**：壁面で確認した床面までの深さは21㎝である。**主軸方位**：Ｎ－76°－Ｅ。**床面の状態**：ほぼ平坦である。調査区内では硬化面は確認されない。掘り方はなく、Ⅶ層を直接床面としている。**埋没状態**：黒褐色土を主体とする自然埋没と推定される。**遺物**：土師器の坏・甕が出土した。総重量は690ｇで、１を除くと小片のみである。１の坏は、ほぼ完全な状態で床面より浮いた位置から出土した。**時期**：出土遺物から、７世紀代に比定される。

11号住居跡（遺構：第18・19図、ＰＬ．５・６／遺物：第24図、第４表、ＰＬ．８）

位置：２区中央に位置する。**平面形**：主軸方向に細長い長方形を呈する。**規模**：南北軸2.53ｍ、東西軸5.15ｍ。**残存深度**：確認面から床面までの深さは28㎝である。**主軸方位**：Ｎ－76°－Ｅ。**床面の状態**：ほぼ平坦である。硬化面は確認されない。貼床で、明黄褐色土ブロックを含む黒褐色土が埋め戻されており、４～12㎝の掘り方を有する。住居中央からカマド前方にかけて、多数の小穴が見られる。規模は長径39～65㎝、深さ29～61㎝で、焼土や炭化物を含む土が充填されている。**貯蔵穴**：住居南東角、カマドの右脇に位置する。ほぼ円形を呈し、規模は長径50㎝、短径48㎝、深さは49㎝である。**小穴**：Ｐ１～４の４本が検出された。床面で明瞭に確認できたのはＰ１のみである。規模はＰ１が長径39㎝、短径30㎝、深さ18㎝、Ｐ２が長径42㎝、短径26㎝、深さ18㎝、Ｐ３が長径49㎝、短径35㎝、深さ22㎝、Ｐ４が長径96㎝、短径90㎝、深さ28㎝である。Ｐ２・３は長軸の中央ライン上に位置することから、主柱穴の可能性がある。Ｐ１・４の埋没土には焼土が多量に含まれる。**カマド**：東壁のほぼ中央に付設される。全長128㎝、燃焼部幅42㎝である。煙道部は燃焼部奥から緩やかに傾斜して立ち上がる。煙道部底面および内壁は部分的に赤色化している。支脚の痕跡は見られなかった。袖は褐灰色土を主体として構築されている。焚口部下には、深さ約21㎝の円形の掘り込みがある。焼土と黒色の灰が互層をなし、底面から焼土混じりの灰（７㎝厚）、灰混じりの焼土（３㎝厚）、灰（８㎝厚）、焼土（３㎝厚）の順で堆積している。埋没土からは、被熱により変色した安山岩が出土しており、カマド構築材などに使用された可能性が考えられる。**埋没状態**：黒褐色土を主体とする自然埋没と推定される。**遺物**：土師器の坏・甕が出土した。総重量は750ｇである。全て小片で、出土量は少ない。**時期**：出土遺物から、７世紀代に比定される。

4．竪穴状遺構

1号竪穴状遺構（遺構：第20図、ＰＬ．６／遺物：第24図、第４表、ＰＬ．８）

位置：２区南壁際に位置し、南側は調査区外となる。**平面形**：方形または長方形を呈すと推測される。**規模**：南北軸1.20ｍ以上、東西軸8.60ｍ。**残存深度**：壁面で確認した底面までの深さは16～28㎝である。**長軸方位**：Ｎ－76°－Ｅ。**底面の状態**：ゆるやかな凹凸がある。Ⅶ層を底面とし、表面には自然礫が露呈している。**小穴**：１本が検出された。規模は長径62㎝、短径53㎝、深さ28㎝である。**埋没状態**：小礫を含む黒褐色土を主体とする自然埋没と推定される。**遺物**：土師器の坏・坩・甕・甑・Ｓ字状口縁台付甕が出土した。総重量は558ｇである。全て小片で、坏・甕の割合が多い。**時期**：出土遺物には古墳時代前期も見られるが、内斜・内稜口縁坏、「く」の字甕、大型甑などが主体となることから、古墳時代中～後期と推測される。

5．溝

1号溝（遺構：第21図、ＰＬ．６）

位置：１区中央より西側に位置し、北・南側は調査区外となる。**重複**：４・８号住居跡、２号ピットと重複する。本溝は４・８号住居跡より新しく、２号ピットより古い。**形態**：北東－南西へやや屈曲気味に走行する。底面は南西側が若干低い。断面は逆台形状を呈し、上段で斜めに広がる。**規模**：残存長8.78ｍ、幅50～66㎝。**残存深度**：確認面からの深さ13～23㎝である。**長軸方位**：Ｎ－49°－Ｅ。**埋没状態**：暗褐色砂質土を主体とし、最下層には礫を多量に含む黒褐色砂質土が堆積する。洪水による自然堆積と推定される。Ａｓ－Ｂの堆積が見られないことから、Ａｓ－Ｂ降下前には埋没していたものと推測される。**遺物**：土師器の坏・甕・Ｓ字状口縁台付甕が出土した。総重量103ｇである。坏は内斜・内湾口縁坏が確認されている。全て小片で図示できるものはない。**時期**：重複関係・埋没状態などから、古墳時代後期以降、Ａｓ－Ｂ降下以前と推測される。

2号溝（遺構：第21図、ＰＬ．６）

位置：１区中央より西側に位置し、北・南側は調査区外となる。**重複**：５・８号住居跡、１号ピットと重複する。本溝は５・８号住居跡より新しく、１号ピットより古い。**形態**：北東－南西へやや屈曲気味に走行する。底面は東側が若干低い。断面は逆台形状を呈する。**規模**：残存長11.08ｍ、幅22～53㎝。**残存深度**：確認面からの深さ６～23㎝である。**長軸方位**：Ｎ－64°－Ｅ。**埋没状態**：小礫を含む黒褐色土を主体とし、中層に黒褐色砂質土が薄く堆積する。自然堆積と推定される。Ａｓ－Ｂの堆積が見られないことから、Ａｓ－Ｂ降下前には埋没していたものと推定される。**遺物**：土師器の坏・甕・Ｓ字状口縁台付甕、石器の剥片が出土した。総重量は208ｇである。坏は内湾口縁坏・模倣坏が確認されている。全て小片で図示できるものはない。**時期**：重複関係・埋没状態などから、奈良・平安時代後期以降、Ａｓ－Ｂ降下以前と推測される。

3号溝（遺構：第22図、ＰＬ．６／遺物：第24図、第４表、ＰＬ．８）

位置：２区北側に位置し、東・西側は調査区外となる。**形態**：北東－南西へほぼ直線的に走行する。底面は北東側が若干低い。断面はＶ字状を呈する。**規模**：残存長14.06ｍ、幅1.08～1.42ｍ。**残存深度**：確認面からの深さ45～62㎝である。**長軸方位**：Ｎ－73°－Ｅ。**埋没状態**：上層は灰黄褐色砂質土、下層は褐灰色砂を主体とする。Ｈｒ－ＦＡ・ＦＰ間運の洪水層による自然堆積と推定される。**遺物**：土師器の坏・坩・高坏・甕・Ｓ字状口縁台付甕・甑、須恵器の坏・蓋・高坏が出土した。総重量は1,070ｇである。大半が最下層の砂層から出土している。古くは４世紀後半のＳ字状口縁台付甕から、新しいものは６世紀代に比定される須

恵器蓋まで確認された。時期：埋没状態や出土遺物から、古墳時代後期以降、Ａｓ－Ｂ降下以前と推測される。

６．ピット（遺構：第５図、第２表、ＰＬ．１・２／遺物：第24図、第４表、ＰＬ．８）

ピットは計６基が検出された。１区で５基、２区で１基である。平面形は楕円形およびほぼ円形を呈する。規模は、長径33～95㎝、短径30～62㎝以上、確認面からの深さ17～53㎝である。全て黒褐色土を主体とした単層で、自然埋没によるものと推定される。調査区全体に散在しており、配置に規則性は認められなかった。

遺物は、３号ピットから土師器のＳ字状口縁台付甕が１点出土してたのみである。時期は、３号ピットが古墳時代前期に比定されるほかは不明である。ただし、埋没土にＡｓ－Ｂが見られないことから、少なくともＡｓ－Ｂ降下前には埋没していたと推測される。

各ピットの計測値などは第２表に示した。

遺構名	地区	グリッド	平面形	規模	深さ	備考
Ｐ１	１	Ｘ＝35886、Ｙ＝-72054	ほぼ円形	49×48	19	奈良・平安時代以降、Ａｓ－Ｂ降下以前。自然埋没。２号溝と重複し、本ピットが新しい。
Ｐ２	１	Ｘ＝35886、Ｙ＝-72049	楕円形	65×53	53	古墳時代後期以降、Ａｓ－Ｂ降下以前。自然埋没。１号溝と重複し、本ピットが新しい。
Ｐ３	１	Ｘ＝35892、Ｙ＝-72028		95×62以上	17	古墳時代前期。自然埋没。底面直上から土器片が出土。
Ｐ４	２	Ｘ＝35893、Ｙ＝-72054	ほぼ円形	39×33	35	Ａｓ－Ｂ降下以前。自然埋没。
Ｐ５	１	Ｘ＝35889、Ｙ＝-72038	ほぼ円形	73×67	32	Ａｓ－Ｂ降下以前。自然埋没。
Ｐ６	１	Ｘ＝35888、Ｙ＝-72040	ほぼ円形	33×30	53	Ａｓ－Ｂ降下以前。自然埋没。

凡　単位：㎝

第２表　ピット一覧表

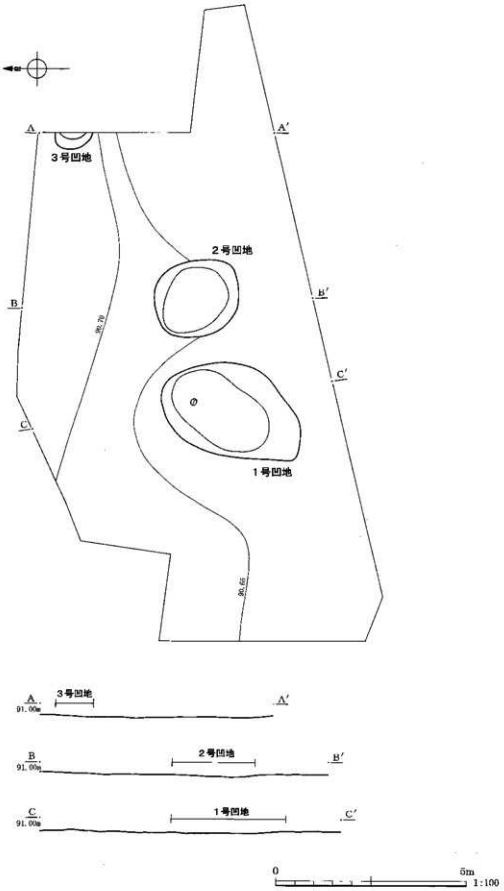
７．遺構外出土遺物（遺物：第24・25図、第４・５表、ＰＬ．８）

本遺跡では、遺構内出土のほかに、調査区全域からも多くの遺物が出土した。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器類などを確認している。掲載した遺物は、遺構に伴わない遺物の中でも、特徴を良く残すものである。

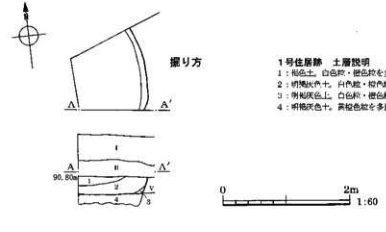
縄文土器は、中期と後期の土器片が確認された。出土量は少なく、重量は160ｇである。２は後期称名寺式に比定される。石器類は縄文時代に帰属すると想定される。重量は30ｇで、３の石鏃や剥片がある。

弥生土器は、胴部片１点のみの出土である。小片のため図示はできなかったが、波状文が施文され、後期樽式に比定されよう。本遺跡の北西には、後期の竪穴住居跡を検出した高関東沖・村前遺跡が存在する。今回出土したのはわずか１点だが、当該期における人々の活動の動向を探る上で貴重な資料といえよう。

土師器は、坏・坩・甕・壺・Ｓ字状口縁台付甕が確認された。重量は3,821ｇで、特に甕の出土量が多い。須恵器は、坏・蓋・甕が確認され、重量は381ｇである。時期は大半が古墳時代に比定され、前期から後期まで確認される。前期はＳ字状口縁台付甕や折り返し口縁壺、中期～後期は内斜口縁坏、内湾口縁坏、模倣坏、「く」の字甕などが見られる。なお、７は中期前半（５世紀前半）、10・11は後期後半（６世紀後半）に比定されるが、調査区内で当該期の遺構は検出されていない。奈良・平安時代は、８世紀前半に比定される返りを持つ須恵器蓋などが確認されているが、小片のため図示できなかった。


A
A′
3号凹地
2号凹地
B
B′
C
C′
1号凹地
A
3号凹地
A′
91.00m
B
2号凹地
B′
91.00m
C
1号凹地
C′
91.00m
0
5m
1:100

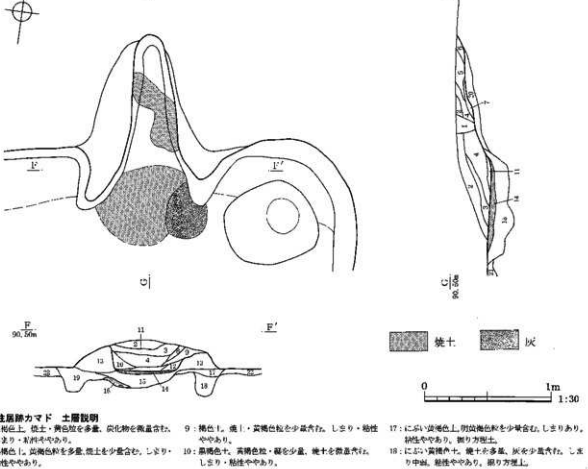
第６図　Ａｓ－Ｂ下凹地



1号住居跡　土層説明

1：褐色土。白色粒・橙色粒を多量に含む。しまり・粘性ややあり。
2：明褐灰色土。白色粒・橙色粒を多量、黄橙色粒を少量含む。しまり・粘性ややあり。
3：明褐灰色土。白色粒・橙色粒を少量含む。しまり・粘性ややあり。
4：明褐灰色土。黄橙色粒を多量含む。しまりあり。粘性ややあり。掘り方埋土。

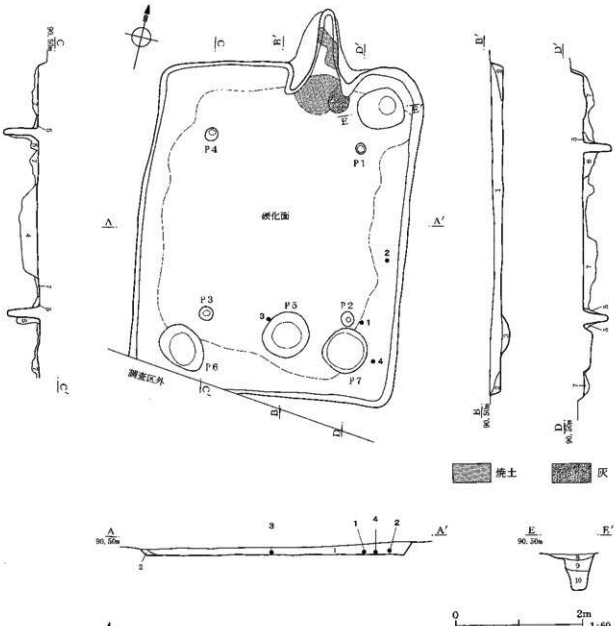
第7図　1号住居跡

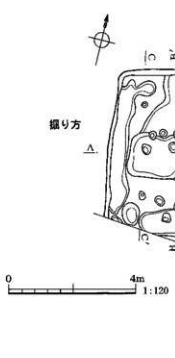


2号住居跡カマド　土層説明

1：黒褐色土。焼土・黄色粒を多量、炭化物を微量含む。しまり・粘性ややあり。
2：黒褐色土。炭化物を多量、焼土を少量含む。しまり・粘性ややあり。
3：黒色土。焼十・黄色粒を少量、炭化物を微量含む。しまり・粘性ややあり。
4：明黄褐色粘質土。黒色土を多量、焼十を微量含む。しまり・粘性あり。構築材。
5：黒色土。焼土・黄色粒を少量、炭化物を微量含む。しまり・粘性ややあり。
6：黒色土。焼土・黄色粒を少量、炭化物を微量含む。しまり・粘性ややあり。
7：黒褐色土。焼十・炭を多量含む。しまり・粘性中位。
8：黒褐色土。粒土を多量、黄橙色粒を少量含む。しまり・粘性ややあり。
9：褐色土。焼十・黄橙色粒を少量含む。しまり・粘性ややあり。
10：黒褐色土。黄橙色粒・礫を少量、焼土を微量含む。しまり・粘性ややあり。
11：明黄褐色粘質土。黒褐色土を多量含む。しまり・粘性あり。
12：黒褐色土。炭化物・黄橙色粒を少量、焼土を微量含む。しまり・粘性ややあり。
13：にぶい黄橙色粘質土。明黄褐色粒を多量、黒色土を少量含む。しまり緩。粘性あり。構築材。
14：焼十。しまり・粘性なし。
15：にぶい黄橙色土。明黄褐色粒を多量、焼土・炭を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。掘り方埋土。
16：黒色粒。しまり・粘性なし。掘り方。
17：にぶい黄橙色土。明黄褐色粒を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。掘り方埋土。
18：にぶい黄橙色土。焼十を多量、炭を少量含む。しまり中位。粘性ややあり。掘り方埋土。
19：にぶい黄橙色土。明黄褐色粒・焼十・炭を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。掘り方埋土。
20：黒褐色土。明黄褐色ブロックを多量、粒土を少量含む。しまり・粘性ややあり。掘り方埋土。
21：黒褐色土。焼土・明黄褐色土ブロックを多量、炭化物を少量含む。しまり・粘性ややあり。掘り方埋土。
22：黒褐色土。明黄褐色ブロックを多量含む。しまり・粘性ややあり。掘り方埋土。

第8図　2号住居跡カマド

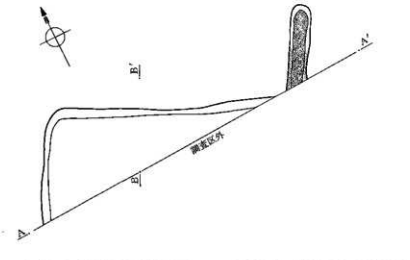


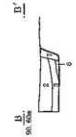


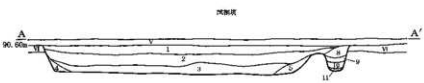
2号住居跡　土層説明

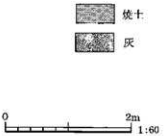
1：黒褐色土。焼土粒・炭化物を多量含む。しまり・粘性ややあり。
2：黒褐色土。明黄褐色粒を多量含む。しまり・粘性ややあり。
3：黒色土。炭化物・明黄褐色粒を少量含む。しまり・粘性ややあり。P5埋位土。
4：黒褐色土。焼土・炭化物・明黄褐色ブロックを多量含む。しまり・粘性ややあり。張り方埋土。
5：にぶい黄褐色土。明黄褐色土を多量、褐色粒を少量含む。しまり弱。粘性ややあり。柱穴掘り方埋土。
6：黒色土。明黄褐色土を多量含む。しまり強。粘性ややあり。柱穴張り方埋土。
7：黒褐色土。明黄褐色土ブロックを多量含む。しまりあり。粘性ややあり。張り方埋土。
8：黒褐色土。焼土・白色粒・明黄褐色粒を少量含む。しまり・粘性ややあり。貯蔵穴埋没土。
9：褐色土。炭化粒を多量含む。しまり小弱。粘性ややあり。貯蔵穴埋没土。
10：黒色土。明黄褐色土ブロックを多量含む。しまり小弱。粘性ややあり。貯蔵穴埋没土。

第９図　２号住居跡





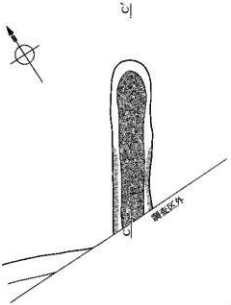


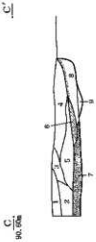


3号住居跡　土層説明

1：黒褐色土。明黄褐色粒を多量、φ1～2cmの小礫を少量含む。しまり・粘性ややあり。
2：黒褐色土。明黄褐色粒を多量、炭化物・φ0.5～1cmの小礫を少量、焼土を微量含む。しまり・粘性ややあり。
3：黒褐色土。明黄褐色粒を少量、炭化物を微量に含む。しまり・粘性ややあり。
4：黒色土。明黄褐色粒を少量含む。しまり・粘性ややあり。
5：黒色土。明黄褐色土ブロックを少量含む。しまり・粘性ややあり。
6：にぶい黄褐色土。明黄褐色粒を多量、焼土を微量含む。しまり・粘性ややあり。
7：にぶい黄褐色土。明黄褐色粒を多量含む。しまりあり。粘性ややあり。
8：黒褐色土。明黄褐色粒を少量、焼土を微量含む。しまり・粘性ややあり。
9：黒褐色土。焼土を多量、炭化物を微量含む。しまり・粘性ややあり。
10：黒褐色土。焼土を少量、炭化物を微量含む。しまり・粘性ややあり。
11：黒色灰。焼土を微量含む。しまり・粘性なし。

カマド

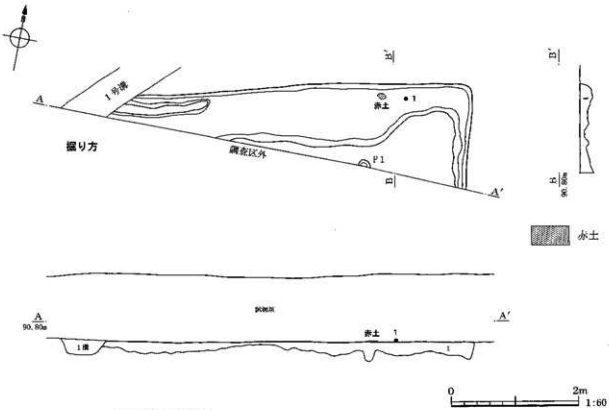




3号住居跡カマド　土層説明

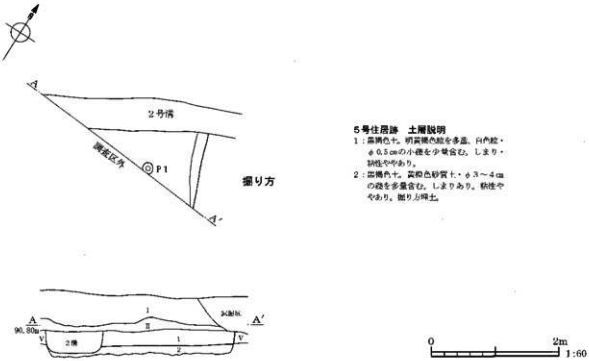
1：黒褐色土。焼土を多量、炭化物を微量含む。しまり・粘性ややあり。
2：黒褐色土。焼土を少量、炭化物を微量含む。しまり・粘性ややあり。
3：黒褐色土。焼土を多量、炭化物を微量、明黄褐色粘質土ブロックを少量含む。しまり・粘性ややあり。
4：黒褐色土。焼土を少量含む。しまり・粘性ややあり。
5：黒褐色土。焼土を多量含む。しまり・粘性ややあり。
6：焼土。しまり中間。粘性中間。
7：黒色灰。焼土を微量含む。しまり・粘性なし。
8：灰黄褐色土。焼土・明黄褐色粒を少量含む。しまり・粘性ややあり。土層に焼土と灰が薄く堆積する。
9：灰黄褐色土。明黄褐色粒を多量、焼土・黒色土を少量含む。しまり・粘性あり。

第10図　3号住居跡



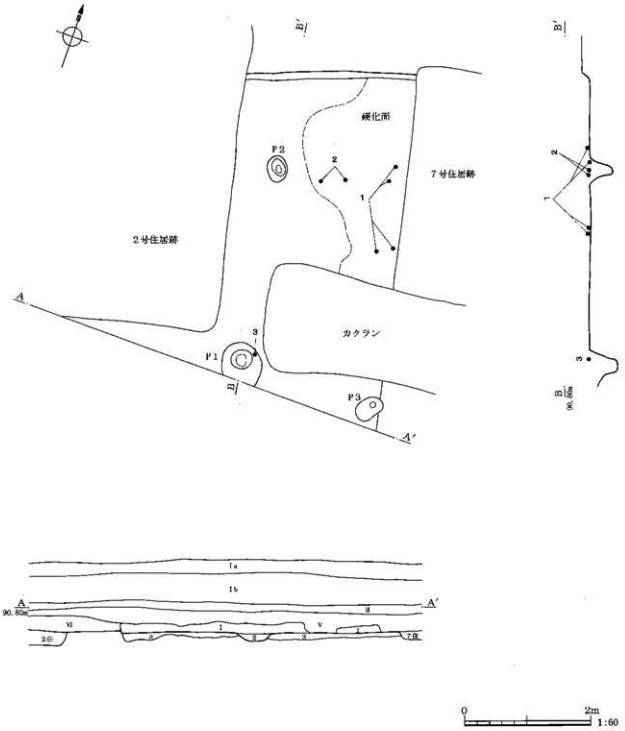
4号住居跡　土層説明
1：茶褐色土。明黄褐色砂質土を多量含む。しまり・粘性やあり。掘り方埋土。

第 11 図　4号住居跡



5号住居跡　土層説明
1：茶褐色土。明黄褐色粒を多量、白色粒・φ0.5cmの小礫を少量含む。しまり・粘性やあり。
2：茶褐色土。黄褐色砂質土・φ3～4cmの礫を多量含む。しまりあり。粘性やあり。掘り方埋土。

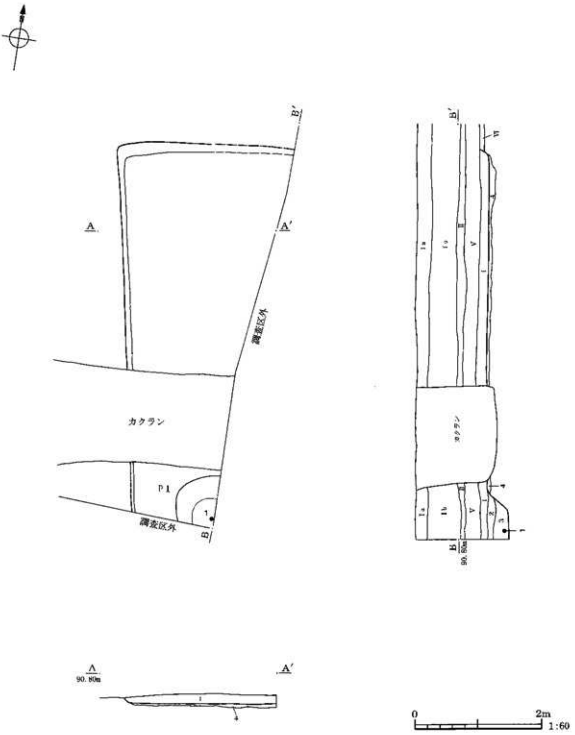
第 12 図　5号住居跡



6号住居跡　土層説明

1：黒褐色土。明黄褐色粒を少量、炭化物を微量含む。しまり・粘性ややあり。
2：暗褐色土。にぶい黄橙色土を大量、白色粒・褐色粒・φ0.5～0.6cmの小礫を少量含む。しまり・粘性ややあり。P1埋没土。
3：暗褐色土。にぶい黄橙色土・白色粒を少量含む。しまり・粘性ややあり。掘り方埋土。

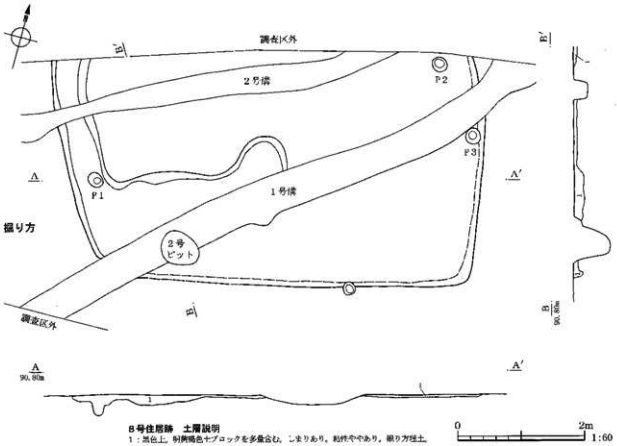
第13図　6号住居跡



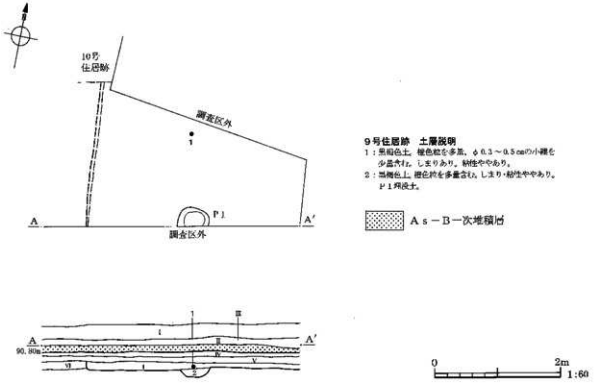
7号住居跡　土層説明

1：黒褐色土。明黄褐色粒を中量、炭化粒を微量含む。しまり・粘性ややあり。
2：黒褐色土。明黄褐色粒・φ1～2cmの小礫を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。P1埋設土。
3：黒色土。明黄褐色粒を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。P1埋設土。
4：暗褐色土。にぶい黄褐色土を大量、白色粒・褐色粒・φ0.5～0.6cmの小礫を少量含む。しまり・粘性ややあり。掘り方埋土。

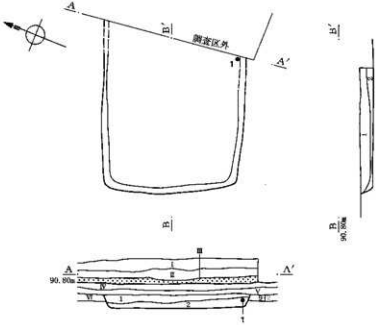
第14図　7号住居跡



第 15 図　8号住居跡



第 16 図　9号住居跡



10号住居跡　土層説明

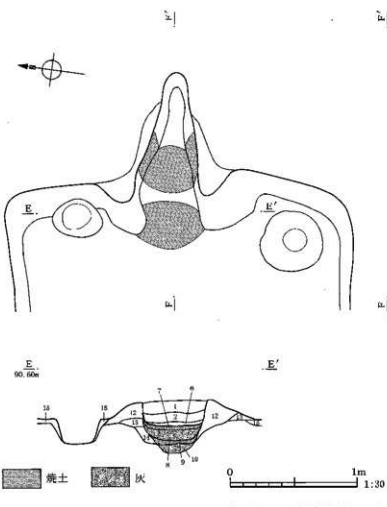
1：黒色土。褐色粒を多量。白色粒・小礫を少量含む。しまり・粘性ややあり。

2：黒褐色土。白色粒・褐色粒を多量含む。しまり・粘性やあり。

As－B　次堆積物

0　2m
1:60

第17図　10号住居跡



11号住居跡カマド　土層説明

1：暗灰色土。褐色粒を多量。焼土を少量含む。しまり中位。粘性やあり。

2：黒色土。焼土を微量含む。しまり中位。粘性ややあり。

3：にぶい黄橙色粘質土。明黄褐色粒を多量含む。しまりややあり。粘性あり。カマド構築材。

4：にぶい黄橙色粘質土。焼土を大量。明黄褐色粒を少量含む。しまりややあり。粘性あり。カマド構築材。

5：暗灰黄色土。明黄褐色粒を多量。焼土を少量含む。しまり・粘性ややあり。

6：黒色土。灰を多量。焼土・炭化物を少量含む。しまり中位。粘性ややあり。

7：焼土。灰を多量。明黄褐色粒を少量含む。しまり・粘性なし。

8：黒色灰。炭を多量。焼土・黄褐色粒を少量含む。しまり・粘性なし。

9：焼土。灰・黄褐色粒を少量含む。しまり・粘性なし。

10：黒色灰。焼土・黄褐色粒を少量含む。しまり・粘性なし。

11：灰黄褐色粘質土。黒褐色土を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。縁り方埋土。

12：暗灰色土。明黄褐色粒を多量。焼土を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。内側は焼けて赤色化。袖構築材。

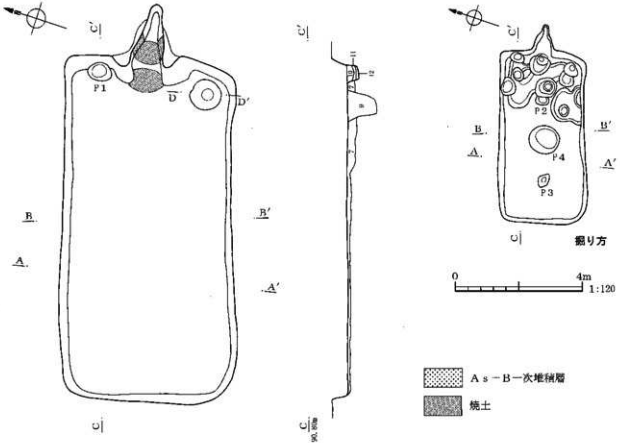
13：黒色土。明黄褐色粒を少量。焼土を微量含む。しまりあり。粘性ややあり。袖崩壊材。

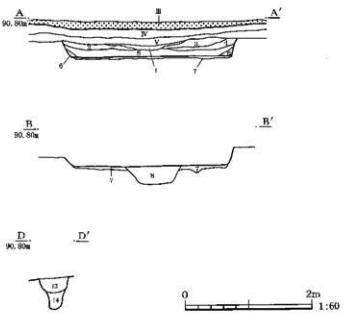
14：黒褐色土。明黄褐色土ブロックを多量。焼土を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。縁り方埋土。

15：黒褐色土。明黄褐色土ブロックを多量。焼土・黒色土を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。縁り方埋土。

16：黒褐色土。焼土・明黄褐色土ブロックを多量。黒色土を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。縁り方埋土。

第18図　11号住居跡カマド

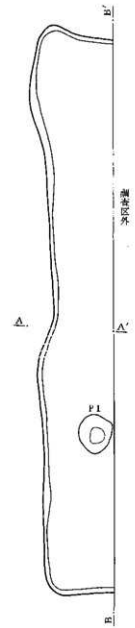


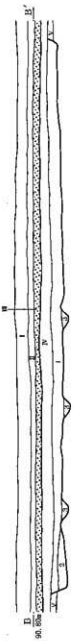


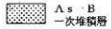
11号住居跡　土層説明

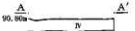
1：茶褐色土。明褐色粒を多量、白色粒を少量含む。しまり・粘性ややあり。
2：黒褐色土。明褐色粒を多量含む。しまり・粘性ややあり。
3：褐色土。白色粒・明褐色粒を多量、黒褐色土を少量含む。しまりややあり。粘性中弱。
4：黒褐色土。白色粒・明褐色粒を少量含む。しまり・粘性中弱。
5：黒褐色土。明黄褐色粒・ブロックを多量、焼土φ0.5～1cmの小礫を少量、炭化物を微量含む。しまりあり。粘性ややあり。
6：黒褐色土。明黄褐色粒を少量含む。しまり・粘性ややあり。
7：黒褐色土。明黄褐色土ブロックを多量含む。しまりあり。粘性ややあり。掘り方埋土。
8：黒褐色土。明黄褐色土ブロックを多量、焼土・黒色土を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。P4埋没土。
9：黒褐色土。焼土・明黄褐色土ブロックを多量、炭化物を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。掘り方埋土。
10：褐灰色土。焼土・にぶい黄褐色粘質土を多量含む。しまり・粘性ややあり。P1埋没土。
11：褐灰色土。φ3～5cmの礫を多量、焼土を少量含む。しまり・粘性ややあり。P1埋没土。
12：黒褐色土。焼土・明黄褐色粒を少量含む。しまり・粘性ややあり。P1埋没土。
13：褐灰色土。橙色粒を多量含む。しまり・粘性ややあり。貯蔵穴埋没土。
14：黒色土。橙色粒を多量含む。しまり中弱。粘性ややあり。貯蔵穴埋没土。

第19図　11号住居跡









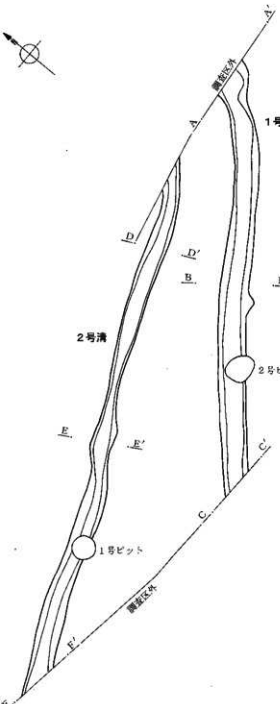
1号竪穴状遺構　土層説明

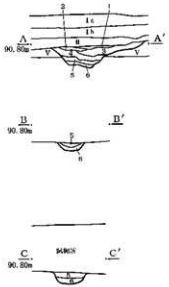
1：黒褐色土。褐色粒を多量、φ0.3～0.5cmの小礫を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。

2：黒褐色土。褐色粒・φ0.3～1cmの小礫を多量含む。しまりあり。粘性ややあり。

3：黒褐色土。褐色粒を少量含む。しまり・粘性ややあり。

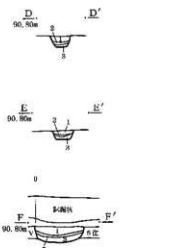
第20図　1号竪穴状遺構





1号溝　土層説明

1：灰茶褐色砂質土。にぶい褐色粘質土を大量含む。しまりあり。粘性あり。
2：紫褐色砂質土。白色粒を多量含む。しまりあり。粘性ややあり。
3：黒褐色砂質土。白色粒を多量含む。しまりあり。粘性ややあり。
4：暗褐色砂質土。白色粒・灰黄褐色粘質土を多量含む。しまりあり。粘性ややあり。
5：暗褐色砂質土。灰黄褐色粘質土ブロックを少量含む。しまりあり。粘性ややあり。
6：黒褐色砂質土。φ5～10cmの礫を多量、灰黄褐色粘質土ブロックを少量含む。しまりあり。粘性ややあり。

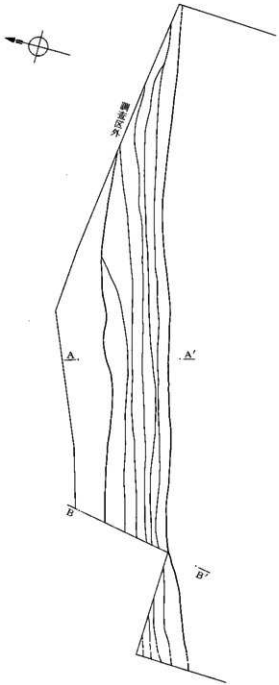


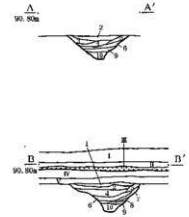
2号溝　土層説明

1：黒褐色土。黄褐色粘質土・黄褐色粒・φ0.5～0.6cmの小礫を少量含む。しまり・粘性ややあり。
2：黒褐色砂質土。黄褐色粘質土を多量、褐色粒を微量含む。しまり・粘性ややあり。
3：黒褐色土。黄褐色ナブロック・φ0.3～0.5cmの小礫を少量含む。しまり・粘性ややあり。

0　2cm
1:80

第21図　1・2号溝





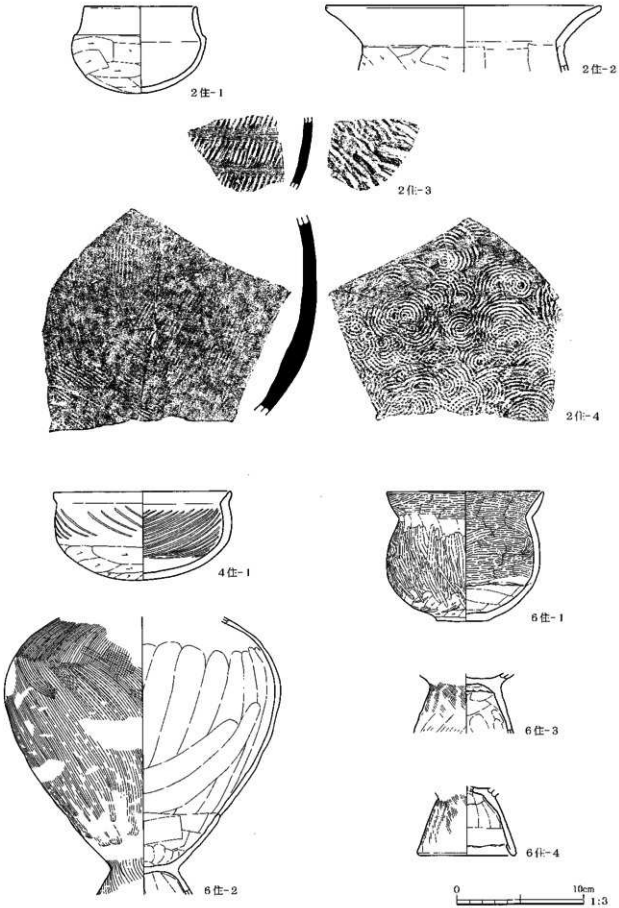
Ａｓ－Ｂ一次堆積層

３号溝　土層説明

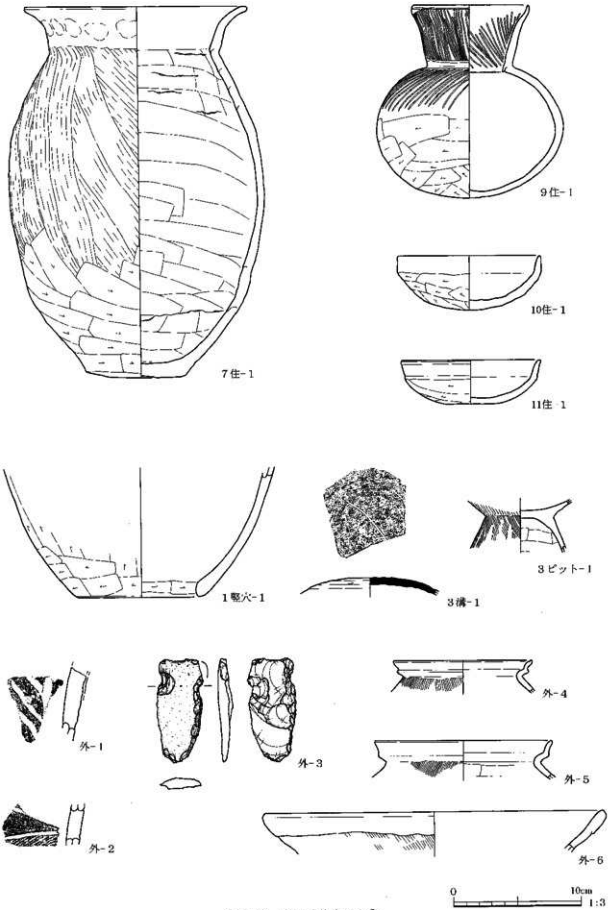
1：褐灰色粘質土。しまりややあり。粘性あり。
2：褐灰色粘質土。IIr－FA・FP間遠洲木層との互層。鉄分を多量含む。しまりなし。粘性あり。
3：灰黄褐色砂質土。IIr－FA・FP間遠洲木層との互層。鉄分を多量含む。しまりなし。粘性ややあり。
4：褐灰色砂質土。IIr　FA・FP間遠洲木層・鉄分を多量含む。しまりなし。粘性ややあり。
5：暗褐色砂質土。炭化粒を少量含む。しまりなし。粘性ややあり。
6：黒灰色砂。黒色土との互層。φ3～5cmの礫を中量含む。しまりなし。粘性なし。
7：黒褐色砂質土。炭色粒を少量含む。しまりなし。粘性ややあり。
8：褐灰色砂質土。しまりなし。粘性ややあり。
9：黒灰色砂。しまりなし。粘性なし。
10：褐灰色砂。9層より砂粒が粗い。しまりなし。粘性なし。

0　2m　1:80

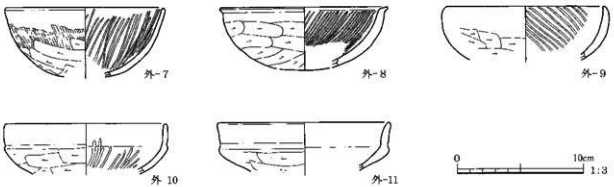
第22図　３号溝



第 23 図　出土遺物実測図①



第24図　出土遺物実測図②



第 25 図　出土遺物実測図③

2号住居跡

番号	器種	法量（cm）	①胎土 ②色調 ③残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 小型壺	口径：8.9 底径： 器高：6.8	①白色粒・黒色粒 ②外：橙、内：橙 ③完形	外：口縁部ヨコナデ。体部～底部ケズリ。 内：口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。	－
2	土師器 甕	口径：(21.4) 底径：－ 器高：残 5.2	①角閃石・白色粒 ②外：にぶい橙、内：にぶい橙 ③口縁部 1/4 残存	外：口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。 内：口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	－
3	須恵器 甕	口径：－ 底径：－ 器高：－	①チャート・赤褐色粒 ②外：灰、内：にぶい黄橙 ③胴部片	外：胴部平行タタキの後、横方向のカキメ。 内：胴部同心円の当て具痕。	酸化焔焼成 気味。
4	須恵器 甕	口径： 底径：－ 器高：－	①チャート・黒色粒 ②外：灰白、内：灰黄 ③胴部片	外：胴部平行タタキ。 内：胴部同心円の当て具痕。	酸化焔焼成 気味。

番号	器種	法量（cm）・特徴	備考
5	棒状礫	長さ：10.3　幅：3.0　厚さ：2.3　重さ：115.85 g、安山岩。	写真のみ。
6	扁圧石	長さ：15.1　幅：5.6　厚さ：5.2　重さ：618.42 g、安山岩。	写真のみ。

4号住居跡

番号	器種	法量（cm）	①胎土 ②色調 ③残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 坏	口径：(13.8) 底径：－ 器高：7.0	①石英・チャート・黒色粒 ②外：にぶい橙、内：にぶい橙 ③2/3 残存	外：口縁部ヨコナデ。体部上下ナデの後、斜方向のミガキ。 体部下半～底部ケズリ。 内：口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデの後、斜放射状暗ミガキ。 底部ヘラナデ。	－

6号住居跡

番号	器種	法量（cm）	①胎土 ②色調 ③残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 小型壺	口径：12.1 底径：4.0 器高：10.3	①チャート・黒色粒 ②外：橙、内：明赤褐 ③4/5 残存	外：口縁部ヨコナデの後、横方向のミガキ。胴部上半ヘラナデ・下半ケズリの後、縦・斜方向のミガキ。底部ケズリ。 内：口縁部ヨコナデの後、横方向のミガキ。胴部ヘラナデの後、上～中位に横方向のミガキ。底部ヘラナデ。	－
2	土師器 S字状口縁 台付甕	口径：－ 底径：－ 器高：残 21.9	①白色粒 ②外：灰黄褐、内：黒 ③胴部～台部 1/2 残存	外：胴部ナデの後、斜ハケ。台部斜ハケ。 内：胴部上～中位縦方向のナデ、下位横方向のヘラナデ。 底部指押え。台部ヘラナデ。	－
3	土師器 S字状口縁 台付甕	口径：－ 底径：－ 器高：残 4.7	①チャート・白色粒 ②外：にぶい橙、内：灰褐 ③台部 2/3 残存	外：台部上半斜ハケの後、縦方向のナデ、下半斜方向のヘラナデ。 内：台部ヘラナデ、下半指押え。	－
4	土師器 S字状口縁 台付甕	口径：－ 底径：(7.5) 器高：残 5.4	①白色粒 ②外：灰黄、内：灰黄 ③台部 1/4 残存	外：台部斜ハケの後、縦方向のナデ。 内：台部上下ヘラナデ、下半ヨコナデ。	－

第 3 表　出土遺物観察表①

7号住居跡

番号	器種	法量（cm）	①粘土 ②色調 ③残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 甕	口径：17.4 底径：7.7 器高：29.2	①チャート・白色粒・黒色粒 ②外：橙、内：赤黄褐 ③ほぼ完形	外：口縁部ヨコナデ。胴部上～中位縦方向のヘラナデ、下位斜・横方向のケズリ。底部外周ケズリ、中央ナデ。 内：口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。底部ヘラナデ。	—

9号住居跡

番号	器種	法量（cm）	①粘土 ②色調 ③残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 直口壺	口径：(9.1) 底径：— 器高：15.2	①白色粒・赤褐色粒 ②外：明赤褐、内：明赤褐 ③口縁部1/3欠失	外：口縁部ヨコナデの後、横・縦方向のミガキ。体部上半ナデの後、横・斜方向のミガキ、下半～底部ケズリ。 内：口縁部ヨコナデの後、斜方向のミガキ。胴部～底部ナデ。	外面胴部下位～底部に黑斑。

10号住居跡

番号	器種	法量（cm）	①粘土 ②色調 ③残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 坏	口径：11.2 底径：— 器高：4.3	①白色粒 ②外：にぶい橙、内：にぶい橙 ③口縁部一部欠失	外：口縁部ヨコナデ。体部～底部ケズリ。 内：口縁部～体部上位ヨコナデ。体部中位～底部ヘラナデ。	外面胴部下位～底部に黑斑。

11号住居跡

番号	器種	法量（cm）	①粘土 ②色調 ③残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 坏	口径：— 底径：— 器高：(3.5)	①白色粒・黒色粒 ②外：にぶい橙、内：にぶい橙 ③1/4残存	外：口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。 内：口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	—

1号竪穴状遺構

番号	器種	法量（cm）	①粘土 ②色調 ③残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 甕	口径：— 底径：(10.2) 器高：残10.2	①石英・チャート・白色粒 ②外：橙、内：明赤褐 ③胴部下位～底部1/4残存	外：胴部ケズリ。 内：胴部ヘラナデ、下端横方向のケズリ。	外面胴部に黑斑。

3号溝

番号	器種	法量（cm）	①粘土 ②色調 ③残存	成・整形技法の特徴	備考
1	須恵器 蓋	口径：— 底径：— 器高：残1.4	①チャート・白色粒 ②外：にぶい赤褐、内：黄灰 ③天井部2/3残存	外：ロクロ調整。天井部回転ヘラケズリ、線刻あり。 内：ロクロ調整。	離化焼成か。

3号ピット

番号	器種	法量（cm）	①粘土 ②色調 ③残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 S字状口縁 台付甕	口径： 底径：— 器高：残4.2	①白色粒・赤褐色粒 ②外：灰黄褐、内：灰黄褐 ③台部1/3残存	外：胴部下端斜ハケ。台部斜ハケの後、縦方向のナデ。 内：胴部ヘラナデ。台部ヘラナデ、上面に砂を含む土が塗られる。	

遺構外①

番号	器種	法量（cm）	①粘土 ②色調 ③残存	成・整形技法の特徴	備考
1	縄文土器 深鉢	口径：— 底径：— 器高：—	①チャート・白色粒 ②外：にぶい橙、内：にぶい黄 ③胴部片	外：縦の條痕、斜め沈線文。 内：胴部ナデ。	1区出土。中期。
2	縄文土器 深鉢	口径：— 底径：— 器高：	①白色粒・黒色粒 ②外：オリーブ黒、内：にぶい橙 ③胴部片	外：単節縄文RL施文。 内：胴部ナデ。	10号住居跡出土。称名寺式。

番号	石器	法量（cm）・特徴	備考
3	石器 石匙	長さ：8.1　幅：残2.75　厚さ：1.15　重さ：残32.2 g、頁岩製。 種皮をもつ薄平横長剥片を素材とする。右側縁は主要剥離面から、左側縁は背面から片面加工を施す。つまみ部は上部に両面加工を施し、やや浅い抉りを作出。刃部およびつまみ部周辺には縦位・斜位方向の摩耗痕あり。	9号住居跡出土。上端部欠失。

第4表　出土遺物観察表②

遺構外②

番号	器種	法量(cm)	①石材 ②色調 ③特徴	成・整形技法の特徴	備考
4	土師器 S字状口縁 台付甕	口径：(10.9) 底径：－ 器高：残2.6	①白色粒・黒色粒 ②外：にぶい赤褐、内：にぶい赤褐 ③口縁部～胴部上端1/6残存	外：口縁部ヨコナデ。胴部斜ハケ。 内：口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	1区出土。
5	土師器 S字状口縁 台付甕	口径：(14.0) 底径：－ 器高：残3.1	①チャート・白色粒 ②外：灰褐、内：にぶい黄橙 ③口縁部～胴部上端1/6残存	外：口縁部ヨコナデ。胴部斜ハケ。 内：口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。口縁部上段が褐灰色に変色。	1区出土。
6	土師器 壺	口径：(26.5) 底径：－ 器高：残3.3	①チャート・白色粒 ②外：橙、内：にぶい褐 ③口縁部片	外：口縁部上位ヨコナデ。下位斜ハケ。 内：口縁部上位ヨコナデ。下位ヘラナデ。	2区出土。
7	土師器 坏	口径：(12.4) 底径：－ 器高：残5.5	①チャート・黒色粒 ②外：にぶい黄橙、内：にぶい黄橙 ③1/5残存	外：口縁部ヨコナデ。体部縦ハケの後、ケズリ。 内：口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデの後、斜放射状施ミガキ。	1区出土。
8	土師器 坏	口径：(13.2) 底径：－ 器高：残4.8	①石英・白色粒・黒色粒 ②外：橙、内：橙 ③1/4残存	外：口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。 内：口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデの後、斜放射状施ミガキ。	2号住居跡出土。
9	土師器 坏	口径：(12.4) 底径：－ 器高：残4.3	①石英・チャート・暗褐色粒 ②外：橙、内：橙 ③口縁部～体部1/6残存	外：口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。 内：口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデの後、斜放射状施ミガキ。	2号住居跡出土。
10	土師器 坏	口径：(12.8) 底径：－ 器高：残4.0	①チャート ②外：橙、内：にぶい橙 ③口縁部～体部1/6残存	外：口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。 内：口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデの後、斜放射状施ミガキ。	1区側溝出土。
11	土師器 坏	口径：(13.4) 底径：－ 器高：残3.8	①白色粒 ②外：橙、内：橙 ③口縁部～体部片	外：口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。 内：口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	1区出土。

第5表　出土遺物観察表③

Ⅵ　まとめ

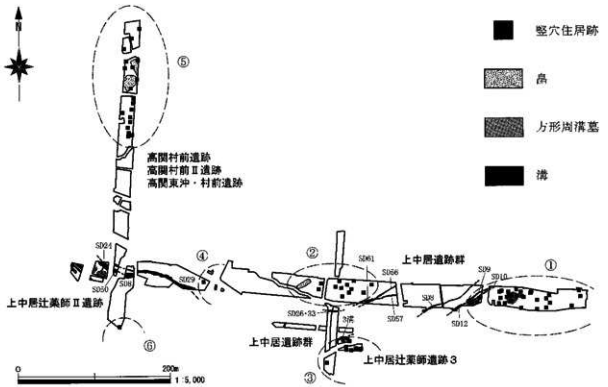
上中居辻薬師遺跡第6次調査では、古墳時代の竪穴住居跡・溝・土坑などが確認された。本遺跡が所在する微高地上には、古墳時代を中心とした集落遺跡である上中居遺跡群、上中居辻薬師Ⅱ遺跡、高関村前遺跡、高関村前Ⅱ遺跡、高関東神・村前遺跡などが存在し、当該期の様相が明らかになりつつある。ここでは、本遺跡における竪穴住居跡出土土器の時期区分を検討し、上述した遺跡の調査成果を踏まえて、集落の動向を概観したい。

竪穴住居跡出土土器の時期区分

本遺跡で検出された竪穴住居跡11軒の内、時期が特定できたのは8軒（2～4・6・7・9～11号住居跡）であった。出土土器の時期は、古墳時代前期～7世紀代にわたる。以下のⅠ～Ⅲ期に大別されるが、Ⅰ期とⅡ期、Ⅱ期とⅢ期の間には断絶が認められる。

Ⅰ期　6号住居跡出土土器が該当し、土器は小型甕、S字状口縁台付甕（以下、S字甕）、壺などが見られる。S字甕はヨコハケが消滅し、胴部がやや長胴化することから、田口編年（田口1981）のⅤ期、深澤編年（深澤1998）の6類に相当すると考えられる。

Ⅱ期　3・4・7・9号住居跡出土土器が該当し、土器は坏、高坏、直口壺、甕、甑、壺などが見られる。坏は内斜および内湾口縁坏で、内面に放射状の施ミガキが施される。内斜口縁坏は口縁部の屈曲にシャープさを欠く。甕は7号住居跡1のように、胴部中位に最大径を持ち、口縁部が「く」の字状に外反するもの



第 26 図　古墳時代の溝と集落分布図

ある。甑は大型甑の破片が確認されている。

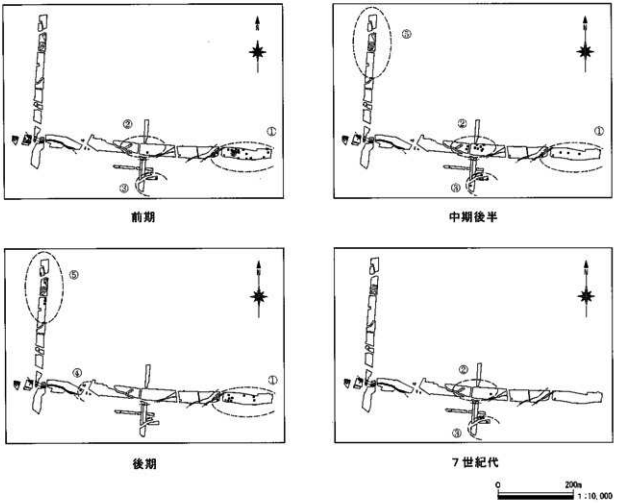
Ⅲ期　2・10・11 号住居跡出土土器が該当し、土器は坏、小型壺、甕、甑、壺、須恵器甕などが見られる。坏は模倣坏と口縁部が直立するもので、口径が 11 cm前後と小型化する。模倣坏は 11 号住居跡 1 のように、体部と口縁部を面す綾線が弱くなり、口縁部の立ち上がりも短いものが多い。2 号住居跡 1 の小型壺は黒斑がなく、胎土が粉っぽい橙色をしたもので、当該期に特徴的に見られるものである。甕は長胴化し、胴部上半に斜方向のケズリを施す。甑はⅡ期同様、大型甑の破片が確認されている。

以上の区分は、群馬県内の時期区分と年代比定（坂口 1986・1987、田口 1981）を参考にすると、Ⅰ期が前期後半（4 世紀後半）、Ⅱ期が中期後半（5 世紀後半）、Ⅲ期が 7 世紀代にほぼ比定できよう。

古墳時代の集落の動向について（第 26・27 図）

本遺跡周辺における古墳時代の遺構検出状況（第 26 図）からは、微高地上を数条の溝が走行する様子を看取できる。これらの溝は、埋没状態の観察から水路と判断される。特に、上中居辻薬師Ⅱ遺跡ＳＤ８－上中居遺跡群ＳＤ29 は幅が 4 ～ 7 m と広いことから、幹線水路に想定されよう。北西から南東方向へ蛇行しており、地形に沿って走行していたものと推測される。また、堀役士中からは、古墳時代前期～中期にかけての土器や石製模造品が出土しており、水辺での祭祀行為も想定されている。この幹線水路からは支溝が分岐していたと考えられ、本遺跡３号溝、上中居遺跡群ＳＤ８・12・56・57・61 などが相当すると推測される。南西から北東方向へ流下し、埋没状態・出土遺物などから古墳時代前期の掘削と想定される（田口 2009）。

集落はこれらの溝沿いに展開しており、6 ヵ所（①～⑥と呼称）の集落域を捉えることができた。集落の動向を概観すると（第 27 図）、始めに成立するのは、上中居遺跡群ＳＤ８およびＳＤ 12 の南東側に展開す



第27図　集落変遷図

る①である。竪穴住居跡の初現は古墳時代初頭で、前期中葉にかけて16軒の竪穴住居跡が確認された。住居数が多く、方形周溝墓を付帯することから、中核的な集落と考えられよう。前期中葉～後半には、上中居遺跡群ＳＤ56・61の北西側や本遺跡３号溝の南東側でも②・③の集落が形成される。両集落とも調査区内では１軒しか検出されておらず、①に比べると小規模であったと推測される。

前期の集落は、その後継続することなく、当該期で途絶える。中期前半に空白期を挟み、中期後半に入って再び集落が形成されるようになる。①・②・③のように前期と同じ場所に営まれる集落がある一方で、⑤のように新たに形成される集落もある。住居数は、①で４軒、②で９軒、③で５軒が確認された。⑤は時期を特定できるものが少ないため、１軒のみの図示となったが、本来は数軒の住居が存在したと推測される。

後期の集落で中期後半から継続するのは、①・⑤のみである。住居数は、①で９軒、⑤で６軒が確認された。これらは小規模な集落と推測され、前期と同様に次代へは継続されず、当該期で途絶えてしまう。また、新たに④で１軒が確認されるが、集落の中心は調査区外となるため前後の継続は不明である。

７世紀代は、中期後半で廃絶された②・③の場所に再び出現する。住居数は、②で１軒、③で３軒が確認された。小規模な集落が営まれるものの、居住地としては希薄な状態であったと推測される。なお、⑥については、時期の特定が困難なため、ここでは取り扱わなかった。

引用・参考文献

折原　覚・大内崇志・田口一郎・田辺芳照・斎藤寛方　2009『上中居遺跡群』高崎市教育委員会

柏木一男・大木紳一郎・中束耕志・橋崎修一郎　2007『中尻町一丁目遺跡』財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

坂口　一　1986「古墳時代後期の土器編年－三ツ寺Ⅲ遺跡を中心とした土師器と須恵器の平行関係－」『群馬文化』208
群馬県地域文化研究協議会

坂口　一　1987「群馬県における古墳時代中期の土器編年－共伴関係による土器形式組列の検討－」『研究紀要』4
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

坂口　一　1999「群馬県における古墳時代中期の土器様相－荒砥三木堂遺跡の出土土器を中心として－」
『東国土器研究』第5号東国土器研究会

関口　修・高井都郎　1992『上中居辻薬師Ⅱ遺跡』高崎市教育委員会

関口　修・高井都郎・星野守弘　1993『高関村前遺跡』高崎市教育委員会

関口　修　1995『高関村前Ⅱ遺跡　高関東神・村前遺跡』高崎市教育委員会

高崎市市史編さん委員会　1999『新編高崎市史　資料編1　原始古代Ⅰ』

高崎市市史編さん委員会　2000『新編高崎市史　資料編2　原始古代Ⅱ』

高崎市市史編さん委員会　2003『新編高崎市史　通史編1　原始古代』

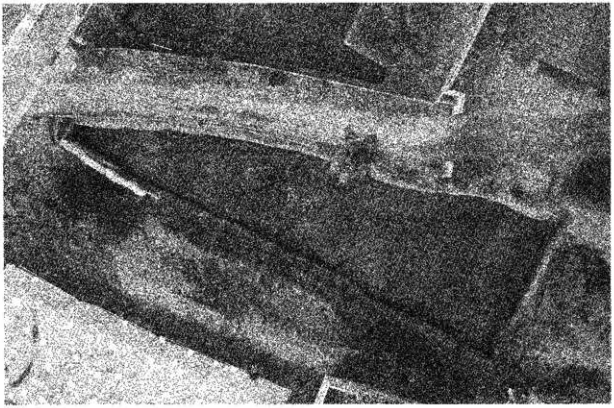
田口一郎　1981『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会

深澤敦仁　1998「上野における土器の交流と画期」『庄内式土器研究16』庄内式土器研究会

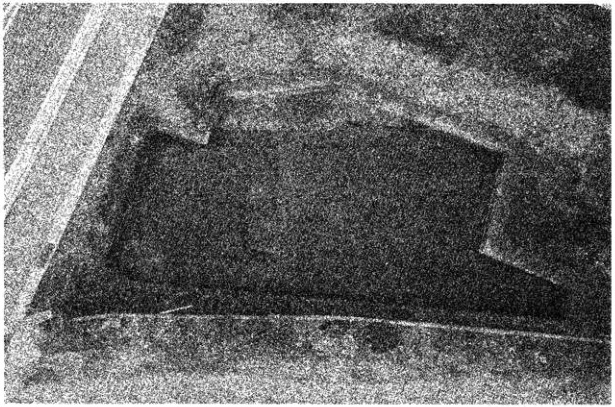
福田敏一・神戸聖海　1989『上中居辻薬師遺跡』高崎市教育委員会

写　真　図　版

遺跡遠景（南西から）



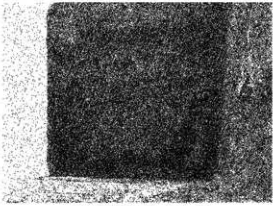
1区全景（上が北西）



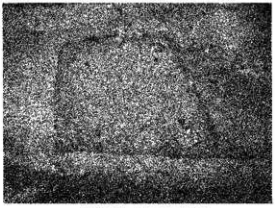
２区全景（上が北）

２区Ａｓ－Ｂ下全景（東から）

2区As－B下凹地検出状況（北東から）

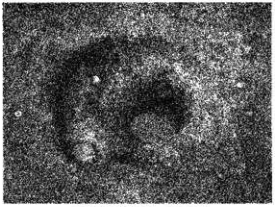


1号住居跡掘り方（西から）

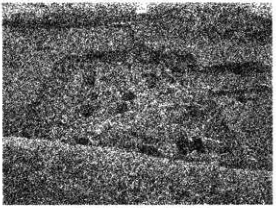


2号住居跡全景（南から）

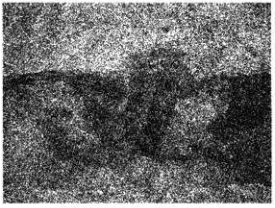
2号住居跡カマド全景（南から）



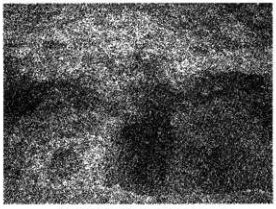
2号住居跡貯蔵穴（南から）



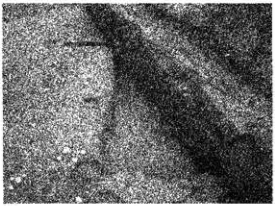
2号住居跡掘り方（南から）



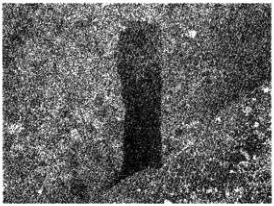
2号住居跡柱穴断ち割り（東から）



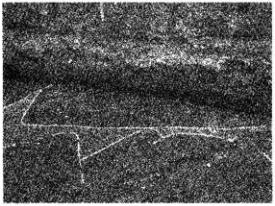
2号住居跡柱穴断ち割り（東から）



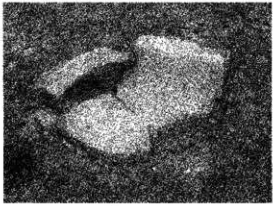
3号住居跡全景（西から）



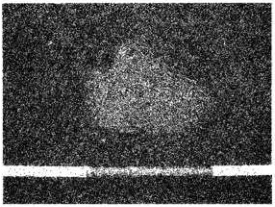
3号住居跡カマド全景（南から）



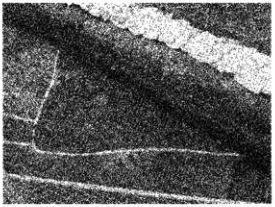
4号住居跡全景（北から）



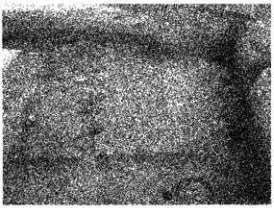
4号住居跡遺物出土状況（北西から）



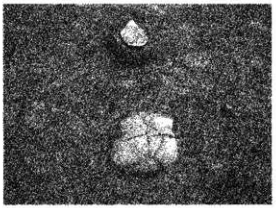
4号住居跡赤土出土状況（北から）



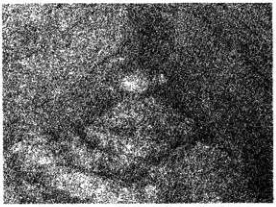
5号住居跡全景（北から）



6・7号住居跡全景（西から）

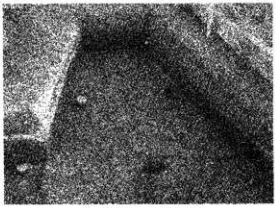


6号住居跡遺物出土状況（西から）

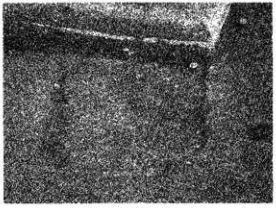


7号住居跡P1遺物出土状況（北西から）

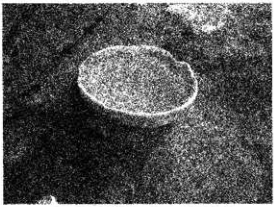
8号住居跡全景（南から）



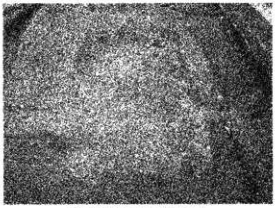
9号住居跡全景（西から）



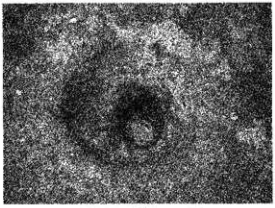
10号住居跡全景（西から）



10号住居跡遺物出土状況（北西から）

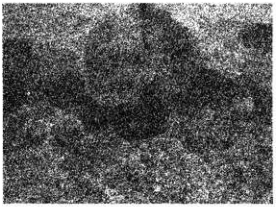


11号住居跡全景（西から）



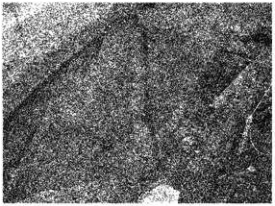
11号住居跡貯蔵穴（西から）

11号住居跡カマド全景（西から）

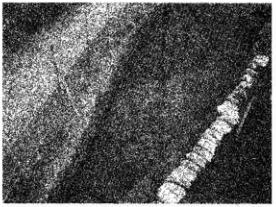


i1号住居跡カマド断ち割り（西から）

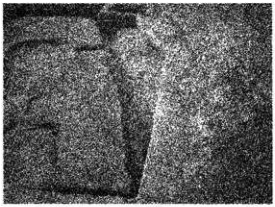
1号竪穴状遺構全景（西から）



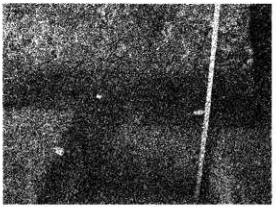
1号溝全景（西から）



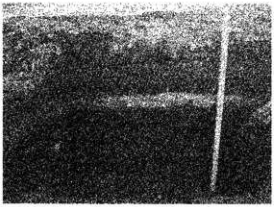
2号溝全景（西から）



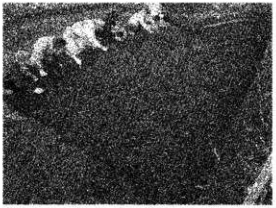
3号溝全景（東から）



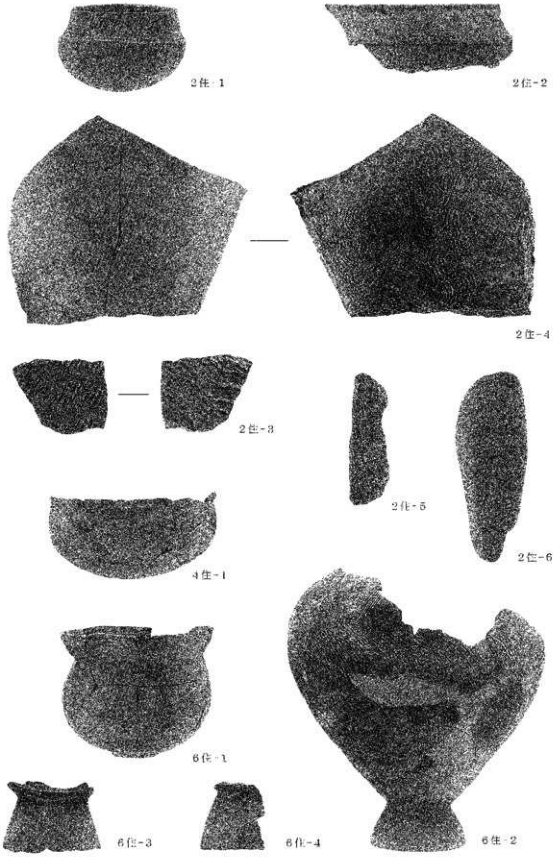
1区基本土層（南から）



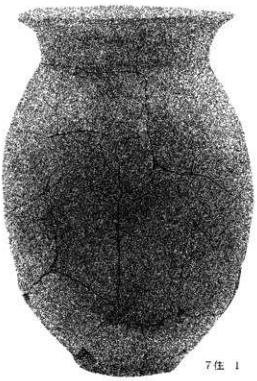
2区基本土層（東から）



調査状況



出土遺物①


7住 1

9住-1

10住-1

11住-1

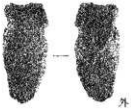
1墓穴 1

3ピット-1

3溝-1

外-1

外-2


外 3

外-4

外-5

外-6

外-7

外-8

外 9

外-10

外-11

出土遺物②

報告書抄録

書名	上中居辻薬師遺跡3
副書名	共同宅地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第249集
編著者名	田口 一郎　有山径世
編集機関	高崎市教育委員会 〒370-8501　群馬県高崎市高松町35番地1　TEL 027-321-1292
発行機関	高崎市教育委員会
発行年月日	平成21年9月30日

上中居辻薬師遺跡3（かみなかい つじやくし いせき）	群馬県高崎市上中居町辻薬師1601番地1（ぐんまけんたかさきし かみなかいまち つじやくし ばんち）	102020	429	36° 19′ 15″	139° 01′ 52″	20081101～20081226	314 ㎡	共同宅地建設

上中居辻薬師遺跡3	集落	古墳時代	竪穴住居跡　11軒 竪穴状遺構　1基 溝　3条 ピット　6基	縄文上層 石器 弥生土器 土師器	古墳時代前期から7世紀にかけての集落遺跡。
		平安時代末期	凹地　3ヵ所	須恵器	

高崎市文化財調査報告書第249集

上中居辻薬師遺跡3

－共同宅地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

平成21年9月25日印刷

平成21年9月30日発行

編　集／高崎市教育委員会

発　行／高崎市教育委員会

印　刷／朝日印刷工業株式会社